

平成 23 年第 12 回

札幌市教育委員会会議録

平成 23 年第 12 回教育委員会会議

1 日 時 平成 23 年 8 月 5 日 (金) 13 時～16 時 32 分

2 場 所 S T V 北 2 条ビル 4 階 教育委員会会議室

3 出席者

委員 長	山 中	善 夫
委 員	白 井	博
委 員	設 楽	雅 代
委 員	西 村	真 理
委 員	池 田	光 司
委 員	北 原	敬 文
教育次長	町 田	隆 敏
生涯学習部長	長 岡	豊 彦
学校教育部長	金 山	正 彦
教育推進課長	蓮 実	一 郎
指導担当部長	池 上	修 次
指導担当課長	横 山	学
指導担当係長	市 川	恵 幸
指導担当係長	佐 田	利 典
指導担当係長	工 藤	真 嗣
指導担当係長	長谷川	正 人
指導担当係長	中 山	明 彦
指導担当係長	山 田	健 一
指導担当係長	紺 野	宏 子
指導担当係長	小 林	直 人
指導担当係長	大 道	弘 孝
指導担当係長	宮 田	佳 幸
指導担当係長	山 田	浩 富
総務課長	長谷川	雅 英
庶務係長	宮 地	宏 明
書 記	川 畑	千 沙

4 傍聴者 25 名

5 議 題

協議第 1 号 平成 24 年度使用教科用図書を選定について

◎ 開 会

○山中委員長 それでは、これから平成23年第12回の教育委員会会議を開会いたします。

本日の会議録の署名は、設楽委員と西村委員にお願いします。

◎協議第1号 平成24年度使用教科用図書を選定について

○山中委員長 本日は、これまでの2回の審議を受けまして、中学校用の教科書、また高等学校用の教科書、特別支援教育用教科書の順に審議を行います。

中学校用の教科書につきましては、国語と書写、数学、理科、保健体育、英語、技術・家庭の技術分野と家庭分野、社会の地理的分野と歴史的分野、さらに公民的分野と地図、音楽一般と器楽合奏、美術の順に審議を進めていきたいと思えます。よろしいでしょうか。

(「はい」の声あり)

○山中委員長 それでは、そのような形で進めてまいります。まず、本日の審議に入る前に、前回までと同様に、私から委員の皆さんに確認させていただきたいことがございます。

前回の教育委員会会議終了後、本日までに、皆さんに、特定の組織、団体、あるいは会社などから、働きかけや影響力の行使、圧力等はありませんでしたでしょうか。

(「なし」の声あり)

○山中委員長 ただいま、皆さんから影響力の行使等は無かったという回答をいただきましたので、本日の私たち6人による協議は、教科書採択の公正・中立性を確保し得るものと判断いたします。

続いて、さらに確認をさせていただくことがございます。

前回までの審議におきまして、各小委員会の委員長さん、それから高等学校及び特別支援教育部会の部長さんに審議委員に対する団体、会社などからの働きかけや影響力の行使、圧力等はありませんでしたかとの質問をいたしました。いずれもありませんとの回答でしたので、それぞれの調査研究に対する圧力等は無かったものと判断いたします。

また、小委員会委員長などの意見につきましては、専門家の発言として参考にしてまいりましたが、本日の審議に当たりましても同様としたいと思います。

これらの点はよろしゅうございましょうか。

(「はい」の声あり)

○山中委員長 それから、本日は、審議会の委員でもあります各担当の指導主事

に出席を求めていますので、審議の中で、必要があれば随時質問していただきたいと思います。

では、これから中学校用の教科書についての審議を始めます。

本日の審議では、前回までの審議におきまして選定の候補といたしました教科書から1者の教科書を選定いたします。

これまでもそうございましたけれども、各教科書の特徴などから、札幌の子どもたちにとって、つまり中学生にとって、どの教科書がより望ましいかという点を大切にして審議をしていきたいと思いますので、よろしく願いいたします。

まず、国語と書写について審議を行います。

7月27日の審議におきまして、国語と書写につきましては、いずれも東京書籍、教育出版、光村図書出版の3者を選定の候補といたしましたので、この3者の中から1者を選定するということになります。

前回の審議を踏まえまして、さらにご質問がございましたらお願いいたしますが、ただ、基本的には、今日は1者を選定するための審議でありますから、こちらにできるだけ多くの時間をとりたいと思いますが、ご質問につきましては、1者を選定するためにどうしても必要だということで、この点を聞いた上で意見を言いたいというようなご質問になるようお願いをしたいと思います。

何か質問、国語と書写に関して何かありますか。

○**設楽委員** 前回ちょっと質問し忘れてしまったのですが、市民意見の中に、これまで教育出版の国語の教科書が使いにくいという意見が出ていたという点があったんですが、そういうふうに現在使っていて使いにくいというようなご意見はあるのでしょうか。実際の現場の先生方の間では。

○**山中委員長** 指導主事の方、お願いします。

○**市川指導担当係長** 使いにくいという言葉は直接聞いたことはないのですが、それぞれの教室において、先生方が工夫されて指導されているというふうにしてとらえていただければと思っております。ただ、使いにくいとかという話は聞いていません。

○**山中委員長** ほかにございませんか。

○**臼井委員** 今の同じことで、市民意見から、光村のもので、色弱の方の配慮のことについてというようなご意見もあったんですけども、ここの教科書は各学年によってバックになる色が変わっていて、例えば2年生を見ますと、2年生の200ページのところを見ますと、ややオレンジっぽいバックに、オレンジの字で書いてあるんですけども、こういうのは、例えば指導上のご経験から、子どもたちにとって、読むのに困難とか何とかということはあるかどうかということなのですが、経験上いかがなものでしょう。

○**市川指導担当係長** 自分が指導しているというのも含めて、そのあたりの色の

というのは、あまり気にはならない。支障にはならないと思います。

○山中委員長 ほかにいかがですか。特にございませんでしょうか。

それでは、前回の審議、それから今の質問も含めまして、さらにまた、委員会の審議における、小委員会の委員長の質疑応答、そういったものを踏まえてこれから審議を進めてまいります。国語の場合には、主として、主体的な学習を促すこと、そしてまた、学習意欲を高める配慮、それからさらに読書活動への関心を高める取り扱い、そういった観点で各教科書に特徴があり、また、そういった特徴を出している、あるいは具体的な扱い方などで違いがあったりもしたかと思えます。それから、書写の場合には、学習意欲を高める配慮、あるいは読書と関連した学習の観点によって各教科書の特徴、あるいはさまざま具体的な手法についての違いがあったように私どもでは一応そんな印象を受けているのですが、基本的にはそんなところかなと思います。皆さんのご意見としていかがでしょうか。

そのほかにも、細かい点ではあるかと思いますが、今大まかに整理させていただいたような観点を中心に、札幌の子どもたちにとって、どの教科書がより望ましいかということについて、各委員からご意見をお伺いしたいと思います。どなたからでも結構ですので、ご自由にいただければと思います。

それから、申し忘れてましたけれども、どうぞ、今日も上着、あるいはネクタイ等をお取りいただいて結構です。私も脱がせていただきます。

どなたかいかがでしょうか。

それでは、私のほうから指名をさせていただいて、順次ご意見を伺っていきたいと思います。

設楽委員、いかがでしょうか。

○設楽委員 私は、読書活動について、いろいろ教科書を見てみました。どの者も以前に考えられないほど、読書ということについてのヒントだとか、示唆に富んだ記述がありまして、それはなかなか甲乙つけがたいなと思ったのですが、特に光村の場合には、資料が豊富で、振り返ってみることができるかなというふうに思いました。

○山中委員長 資料が豊富で、振り返ってみることができるという点で、光村がよろしいのではないかと。もちろん、そのほかに採択参考資料の研究、あるいは札幌市としての研究すべき観点というようなことで、A、Bの2つの観点として、その辺は大体似たようなものだというような意見を前提にしながら、今の2点について考えてということですね。

○設楽委員 先ほど臼井委員からご質問があったのですが、市民意見では、なかなか色弱の方にちょっと見にくいとかというご意見も出ていたので、その辺はどうかなというふうに思いました。私自身はそれほど見にくいとかというふうには

感じませんが、色弱ではありませんので、その辺の配慮はどうなっているかなというところがちょっと気になるころではあります。

○山中委員長 ご専門の関係から。

○設楽委員 色弱は、いろいろ程度があるので。どうでしょう、どの教科書も最近はそのことを配慮しているのではないかなというふうに思いますが。

○山中委員長 次、西村委員いかがでしょう。

○西村委員 私も3者を比べてみて、ぱっと見とか、そういうものではなかなかよし悪しはつけられなかったのですけれども、1点、私が感じたところは、この間の話にもありましたけれども、漢字は読めるけれども書けないということで、漢字の書き方をどうやって教えているのかなというところをちょっと見てみたんですけれども、例えば光村の1年生の32ページには、漢字を確認しようということで、1つの漢字ではなくて、熟語で覚えていくというか、熟語として漢字を覚えていくように力を入れているのかなとちょっと思ったりしました。

光村は、ほかの文章もいい文章がたくさんありますし、最初の導入部分が非常に目次も含めてわかりやすく、私たちは何を勉強するのかというのが、私でもわかったんですね。ですから、子どもたちもきっとこれを見ながら、自分は何をこの単元で学習していくのかというのが、光村がわかりやすいのかなというふうに思いました。

光村図書が私はいいと思います。ただ、先ほども言いましたけれども、市民意見の中にあつたこと、それと教育出版に関しては、今まで教育出版を使っていたので、急に教材が変わってしまう、同じ教材も幾つかあるようだけれども、新たな教材が増えることによる現場の混乱ということがどうなのかなというのがちょっと心配なのですけれども、純粋な気持ちでは光村がいいと思います。

○山中委員長 指導主事にお聞きしたいのですが、今の西村委員の、現場が、教科書が変わることによってどうなのか、その辺の心配とか、この辺についてはどうでしょう。

○市川指導担当係長 確かに、新しい教材研究をスタートするという点については、負担感はあると思うのですが、要するに読むことの教材についての部分になると思うのですよね。そこの部分については、今、現行の教育出版にしても、今新しくなる教育出版の教科書を見ても、半分くらいやっぱり入れかわっている部分で教材研究はしなければならないのは同じですし、ほかの教科書になったとしても、教材研究しなければならないのは同じなので、そんなに混乱はないかなというのが一つと、もう1個、札幌市の中学生、そして国語科の先生のために最もふさわしい教科書を選んでいるということなので、導入時は多少の混乱はあるかもしれないのですが、教科書の構成上、各者ともどんな構成になっているのかというのを先生方が理解すれば、そういう問題はすぐ乗り越えられるのかなと思

っております。

○山中委員長 ということですが、西村委員何か補足的に。

○西村委員 それであれば、特に。

○山中委員長 それでは次に、北原さんは委員でもあります、事務方のトップでございますので、北原委員はちょっと後回しにさせていただきまして、池田委員いかがですか。

○池田委員 私は、読書のところを重点にいろいろ見させていただきましたけれども、やはり読書、今まで習った物語を振り返ることが繰り返されていたり、あるいは、言葉に出会うためにということで、そこら辺を冒頭に設けているという意味では、光村図書が学習に興味を引くというか、意欲を高める一つの教科書だなということで、光村がいいなと思っているところです。

○山中委員長 ありがとうございます。続きまして、臼井委員。

○臼井委員 今、3者のものをちょっとあわせて見ている、札幌市の重点的なものも読書なのですけれども、それぞれ委員の方もおっしゃっていたのですけれども、3者とも読書についてはかなり重視しているということはわかったのですけれども、特に光村と、それから東京書籍については、本の内容についても書いてあって、東書では、やや光村よりも詳しく読書の案内ということについて内容を書いてあるという点では、東書がおもしろかったかなというように思いました。

それからあと、書くことが最近弱いということがあって、書くことについても見ていたのですけれども、これでは、ちょっと魅力を感じたのは、3年生の教科書で、光村が3年間の歩みを編集しようということの「ポートフォリオを編み、語り合う」というような部分を載せていて、これは3年生のまとめということで締めている点ではなかなかおもしろいなと思いましたし、また、教育出版では、アイデアの出し方とか、こういう研究のテーマであるとか、掲示を含めても、ほかの出版社もあるんですけれども、比較的こういうところが詳しいかなというように思っておりました。

あと基礎知識の定着ということでは、光村が漢字や何かの練習なんかでも、こういうふうと比較が載っていたので、札幌市の子どもたちもこの辺の基礎学力の定着というところを課題にしている面もあるので、この点では光村がいいのかなと思いました。

あと使い方なのですけれども、教育出版が非常に特徴的で、読む、話す、聞く、書く、伝統文化、言語というように、ほかのところは詩もあれば、小説もあれば、科学的なエッセイもあればなんですが、ここはこんなふうにもとめていて、この辺、教師の扱い方であって、どんなような順番でやろうかということは、それは現場サイドの自由裁量ということでは、教師の側の持っていく工夫ができるという点では、教育出版がいいかなと思うんですけれども、その一方で、経験の

浅い方もいろいろあるということを見ると、それ以外の光村、東書のようなやり方のほうが一般的かなというような気がします。

等々申しまして、一つに絞れと言われるとちょっと難しいのですけれども、光村と教育出版ということの2つを、ちょっと今同じように決めているということです。

○山中委員長 まだ結論が出ていないと。

○臼井委員 はい。

○山中委員長 北原委員いかがですか。

○北原委員 今、お話に出た教育出版と光村ということ、この間お話が出ていました図やグラフをどう読み取っていくかというPISA型の読解力という観点からすると、教育出版の特徴がよく出ていたかなというふうに思います。

また、読書という観点から見て、先ほど来ご指摘をされているように、特に、読書記録とか読書ノートという観点から見ていきますと、東京書籍と教育出版について言いますと、私が見落としている部分もあるかもしれませんが、1年と3年に扱いが出ています。光村に関して言うと、1年生で最初に読書ノートの記録の例が出ていて、その後にそれを見返そうということが出ていて、その後、続けていこうという、1年生の中だけで出ている。2年生でも読書記録を続けていって、3年生でも続けていこうとか、振り返ろうとかという項目が次々出てきて、そういう取り組みが継続的にできるという、そういう特徴が極めて強く出ているところかなと。そういう意味でいうと、札幌市が進めようとしている読書という観点からいうと、大きな特徴があるかなというふうには思っただけでいいところでは。

○山中委員長 どちらとか、今考えている、1者にするならこれとか。

○北原委員 そういう意味でいうと、読書に特徴があった光村が、極めてその部分での特徴が強く出ているかなというふうには思っております。

○山中委員長 そうしますと、臼井委員がちょっとまだ1者に決めかねているというようなご意見でございますが、ほかの方の意見なども含めた上で、臼井委員としては、補充ございますか。

○臼井委員 補充ございません。

○山中委員長 そうしましたら、国語につきましては、光村を札幌市の24年に使用する教科書に選定にすることにはしたいと思いますが、よろしいですか。

(「はい」の声あり)

○山中委員長 そうすることにさせていただきます。

なお、具体的な理由につきましては、先ほど各委員から出ていたことにつきまして、後でまとめさせていただきます。

続いて、書写について、まず、ご意見を伺いたいと思いますが、ご意見ありま

したらおっしゃっていただきたいんですが、いかがでしょう。

では、これも順次ご意見を伺っていくということにいたします。西村委員いかがでしょう。

○西村委員 前にお伺いしたときに、国語と書写とが同じである必要はないということだったのですけれども、合本である光村もいいのかなというふうに、実は一番最後に行書と楷書が並んで書いてあるという、これが結構私は気に入っております、各者別々に書いてあるのはあって、合本になってくるとあっちに飛んだりこっちに飛んだりというので、なかなか全部を見ることができなかつたのですけれども、これは全部を見ることができて、こういうふうに字というのはなっているのだというようなこともわかりましたし、あとは帯をつくらうでしたか、そういうような活動で、実際の活動と書写の活動がつながっていくというようなことも顕著だったと聞きましたので、光村の合本ということでもいいかなと思いました。

○山中委員長 それでは、次に池田委員。

○池田委員 私も同じほうがいいかなというふうに思っただけで、もう一度改めて見てみたのですけれども、両方とも本の帯をつくる、それから教育出版の日めくりカレンダーも捨てがたいなというようなこともありまして、悩むところなのですけれども、同じような教材と、それプラス、光村の場合、イラストとか写真とかも結構使っていますので、非常にかかわって取り組んでいきやすいとか、吸い込まれていくのではないかなと。このことも含めまして、同じ光村がいいかなというふうに思っております。

○山中委員長 臼井委員いかがでしょうか。

○臼井委員 私、今出てきましたように、国語とは別にリンクすることはないという原則を考えてみたわけではすけれども、結論的に言うと、光村を支持したいのですが、理由は、1点は合本になっているということです。書道の場合には、1年から3年までの全体の見通しをこの中で見やすいということと、教室の指導の中では、学年配当にこだわらないで指導ができるという点もありますので、その点で、合本になっているというのが便利ではなかろうかということで光村にいたします。

○山中委員長 設楽委員いかがですか。

○設楽委員 皆さんおっしゃってたとおりで、私も、合本というのが、新鮮な感じとか、何か連続性とか、見通しを持って学習する、それから自分なりに学習するというのも、その合本である利点があるかなというふうに思いましたので、あとは各者それぞれいろいろ工夫をされていて、その点はそんなに大きな差を感じませんでした。使用上のことで考えると、光村かなというふうに思いました。

○山中委員長 北原委員いかがですか。

○北原委員 例えば文字を見ていて、濃淡がついて、どういうふうに筆遣いをしているかということかというと、光村がモノトーンで、こっちは色がついて、朱墨を確認しながらできる。色覚にかかわらずに言わせてもらえれば、朱墨を使っているほうが見やすいかなというふうには感じました。

そして、教材とのかかわりということで考えていくと、必ずしもリンクしてなくてもいいという話でもありますけれども、ただ、実際、光村の国語の教科書と書写の教科書を比較していくと、実は教育出版の書写の教科書で使っている教材というのは、結構、光村の国語の教科書で使っている教材と重なっております。かなり重なっていて、むしろ光村の書写の教科書よりも、教育出版の教科書のほうがその辺のつながりが強く出ていたりする部分が結構あります。

そういう意味でいうと、書写のほうの朱墨と、とりわけ2年生、3年生になるとなかなか書写の時間の設定って難しいのですけれども、そういう意味で、教科書とリンクしている教材が対応されている教育出版の書写の教科書のつながりというのは、結構使い勝手がいいのかなというふうに思ったりもしました。そういう意味でいうと、教育出版がいいかなというふうに思ったところです。

○西村委員 どのあたりにつながりがあるのでしょうか。

○北原委員 教育出版でいいますと、例えば、「いろは歌」が光村図書にありますが、これは光村もありますけれども、16 ページに「いろはにほへと」の文句があります。それから、20 ページに「走れメロス」が載っております。そして、22 ページに「春はあけぼの」、23 ページに「祇園精舎の鐘の声」「枕草子」と「平家物語」、そして手紙を書くはどちらもありますので、28 ページとかそのあたりは結構あるようですが、32 ページに立石寺の「閑かさや 岩にしみ入る 蟬の声」、陸奥新聞、新聞づくりというところでも、これも光村の教科書に載っている教材です。40 ページにも「おくのほそ道」、月日は百代の過客にしてというところとか、その後ろに「五月雨を 集めて早し 最上川」とか「夏草や つわものどもが 夢の跡」の短歌とか、これらがすべて光村の教科書に、国語の教科書に載っている教材がそのままここで扱われているということかというと、随分リンクしやすい中身になっているなというふうには思っております。

○山中委員長 ただ、北原委員、光村の書写の教科書もつながりはありますよね。

○北原委員 一応はありますけれども、むしろ光村よりも、教育出版のほうが深く関連するものがある、多いです。

○山中委員長 その辺についてどうですか、指導主事の方のほうで。つながっているということに関しては。

○市川指導担当係長 確かにつながっているのだなと今話をお聞きしながら感じたところなのですが、国語の授業で学んだことを書写でやるということに関し

ては、今、つながりがあったほうが指導の関連性という部分ではいいのかなというふうに思います。

○山中委員長 今の北原委員のお話は、より教育出版のほうが、つながりがあるのではないかというご指摘でしたが、その他の点も踏まえながら、さらにご意見あればお願いします。

○設楽委員 意見ではないのですけれども、こういうほうが指導しやすいのですか。赤いほうが。

○北原委員 見やすいかなということです。実際、子どもが朱筆を使うという場面は、当然ほとんどあり得ないですけれども、直す先生からすると。

○設楽委員 修正されるというか、先生方に直されるという。でも、見やすいわけですか。

○北原委員 ええ。

○西村委員 それを私も実は思ったのですけれども、黒でもいいかなとか。要するに濃淡ですよ。

○臼井委員 あと1つ質問なのですけれども、先ほど合本のメリットがあろうかなと思ったのですが、逆に合本のデメリットということは、考えられることとしてどんなことがありますでしょうか。1から3まで全部一緒にしているのと、1つは1と2・3となっています。配当の授業時数に対応しているのでしょうか。

○市川指導担当係長 配当の授業時数については、書写は1年と2年生が同じ授業時数なのですね。20、20で。3年生だけが10というふうになっておまして、「1」「2、3」の組み合わせではなくて、「1、2」と「3」という形が時数的には同じになっている。

○臼井委員 合本で何か不自由なことというのは、どういうことが考えられるでしょうか。

○市川指導担当係長 これは小委員会とかでは議論にはなりませんでした。いいものだけを見て行きましょうということで議論しましたので。

○山中委員長 ほかの、北原委員以外の方から合本のところを含めて、ご意見いかがですか。

○北原委員 大した違いではないのですけれども、合本にすることによって、3年間同じ。2冊にするよりは1冊にしたほうが、重さとしては軽くなっていますが、ただ、その時間時間のことで考えると分冊にしていたほうが軽いですよということはあるかとは思いますが。

○山中委員長 合本ではそういうことですね。さっきご指摘があったように全体を見ると先の見通しとか、あるいは理解ができるとか、そういったところについては。

○北原委員 実際、私自身も国語で書写の指導もしてきましたけれども、その意

味でいうと、今、指導主事のほうから、1年、2年と、そして3年なのだという話もありましたけれども、実際、1年生の扱いを重点的にやって、2年、3年、私の経験からすると、授業との関わりの中でやっていくということのほうが多かった気がします。そういう意味でいうと、当時と授業時数の持ち方やなんか違ってきていますから、一概には対比できませんけれども、1年生用と2・3年生用があって、別冊になっていることに対する不自由さはあまり感じないで済んでいるかなというふうには思っております。ただ、先ほどご指摘があったように、行書と楷書、両方一遍に見えたほうがわかりやすいという部分でいうと、合本になっているメリットが、あるいはあるかもしれません。

○**山中委員長** さて、この委員会としては、最終的には多数決もあるのですが、できるだけ総意で決めていきたいと思っておりますけれども、皆さんの今のご意見を伺っていると、光村のほうのご意見が多いのですが、北原委員としては、国語も含めた全体としての配慮として、光村で採用していくという方向についてはいかがでしょうか。

○**北原委員** 教育出版がいいという言い方をさせていただいたのは、光村が悪いということではなくて、光村についても、先ほどの教材の関連性という意味でいうと、教育出版と比較しての話はさせていただきましたけれども、当然、同じ者で、その関係からしても、国語の教材との関連も十分に強くありますし、先ほど西村委員からご指摘のあったようなよさも当然ありますので、光村について異存はございません。

○**山中委員長** それでは、総合的に判断させていただいて、書写につきましても、国語と同じ光村を選定するという方向にさせていただければと思います。よろしゅうございますか。

(「はい」の声あり)

○**山中委員長** 具体的な理由につきましては、先ほど委員からいろいろ出ておりましたものを整理して、次回の最終回にかけたいと思います。

次につきまして、数学でございますが、数学につきましては、前回の審議におきまして、東京書籍、大日本図書、教育出版の3者を選定の候補といたしまして、この中から1者を決めるということになります。

前回の審議を踏まえて、1者に絞るために質問しておきたいということがございましたら、委員の皆さんからお願いいたします。いかがでしょうか。

○**設楽委員** 時間数は増えているのですけれども、たしか大日本は2割程度ページ数が多いというふうなご指摘がありまして、取り扱う問題量が多いということなのですが、時間数とかで、全部できるものなのでしょうか。

○**中山指導担当係長** 委員ご指摘のとおり、大日本については、他の7者の平均のおよそ2割総ページ数が多く、こちらについては、小委員会の中でも、通常の

授業の中で扱い切れない可能性があるのではないかというような意見が出ておりました。

○山中委員長 よろしいですか。

○設楽委員 はい。

○山中委員長 ほかにございますか。

特になければ、選定に関してのご意見を伺っていきたいと思います。どなたかご意見ございませんか。

それでは、これも指名させていただいて、順次、ご意見を伺っていきたいと思います。まず、池田委員からどうぞ。

○池田委員 私も、大日本の件については、「考えてみよう」というようなテーマですけれども、学んだ数字を活用するという点は、非常にありがたいものがあるなというふうになんかと思って、また改めて見直してみましたが、本当に量が多くてありがたい反面、負担にもなるかなと思って、若干悩んだところもあります。

そこで、改めて見て、教育出版が、学んだことからいろいろなことのヒントが出てくるといいますか、ヒントなど助けになる、いろいろな問いかけですとか、そういうのも多くて、むしろ数学になじんでいく場面が多いのではないかなというふうなことで、私は教育出版がいいかなというふうに思うのと、話し合いを活用していくという場面もあったりしましたので、その点もいいかなというふうに思っております。

○山中委員長 続きまして、臼井委員。

○臼井委員 私、1年生の一番最初が正の数、負の数というところがありますので、これはやっぱり小学校のときから、マイナスというような概念をどんなふうに見えるのかなというところが興味を持って見たわけですが、それぞれ、大日本は各地の気温を入れていて、教育出版の場合にも各地の気温が入って、それから東書は温度の最高、最低、ゴルフのスコアとか、サッカーの勝ち点とか、この点で見ると、東書の入り方が一番詳しくあったかなというふうなことで見ました。

それから、2年目のところで、主に連立方程式のところを見たのですが、それぞれ応用問題として、現実の例から入っているのは3者ともみんな同じで、これについてはみんなそれぞれ具体的などころではあまり違いが感じられませんでした。

3年生のところでは、最後に標本調査がありまして、そのところで、東書はTIMSSの調査の中で、中学生の生活、学習時間について見ているというところでも、身近な問題から入って行って、なかなかおもしろいなと思いました。

教育出版の場合には、ここだけではないのですが、すべての1年、2年、

3年で、前の学年の復習が最初に入ってくるというところで、数学ということは積み上げなので、やっぱり前の学年で習ったことをしっかり確認の上で次のところに行くという、その辺の積み重ねという点で教出、それから問題の誤答、間違った答えに対することやなんかというのは、これは教育出版でなくて、ほかにもあるのですけれども、この辺のところも比較的教育出版が丁寧かなと。

大日本の場合には、問題の数が多いのですけれども、そして、字がやや小さく、少し見にくいのかなという面を感じました。

そんなことを総合的に考えますと、1番に教育出版で、2番目に東書かなというような考えであります。

○山中委員長 それでは、設楽委員お願いします。

○設楽委員 臼井委員が詳しい全学年のいろいろな点を比較してくださったのですが、私はそれほど格段、学年を比較していたわけではないですが、東書の場合には、前の学年のことを振り返られるような、そういう配置になっていまして、そういう意味では、苦手な問題とかというのがそれぞれあっても、自分で考えて進めていく、数学離れということも言われていますけれども、そういうのを、誤答の問題も含めて、配慮があるかなというふうに思いました。

大日本は、さっき質問したのですが、やっぱりかなり数が多くて、それで実際に本当に3年間で全部できるものかなというふうにちょっと思いまして、その面では、少しストレスを与えるようなものではないかなというふうに思った次第です。

そのような中で、東書がいいかなと思いました。

○山中委員長 西村委員いかがですか。

○西村委員 私、はっきり言いますと、東京書籍と教育出版で悩んでいるという状況なのですけれども、教育出版は、先ほど臼井委員も言っていましたけれども、各章の前に振り返りのところがあって、前に、1年生で何を習ったとか、同じ学年の中の何を習ったとかというところが振り返ることができるようになっていて、非常に学習がスムーズに、新しい章に入っていけるのかなというふうに思いました。

また、この間、私が質問したのですけれども、数学の中で話し合い活動ということが随分重要になってきたということで、これも教育出版が特徴的であったということで、東京書籍もいいのですけれども、教育出版のほうがちょっと上かなというぐらいで、その辺は東京書籍と教育出版、本当に悩むところではあります。

大日本は、先ほど何回も言っていますけれども、問題量がちょっと多いかなと思いました。

○山中委員長 北原委員いかがですか。

○北原委員 例えばということで意見を出させていただきたい。各者同じような

問題があって、それをどんなふうに考えていったらいいのかということで見えてきますと、例えば、大日本図書の1年生の195ページ、一番下、問の2、右の図は丸い皿の一部です。この円の中心はどのようにすれば求めることができますかという問題があるのですね。東京書籍の1年生の162ページの下のところ、これは銅鏡、銅の鏡の模式図が出ていて、この銅鏡の形を円と見て、その円を作図しなさいという問題があるのですね。考え方が示されていて、実際にやってみなさいと。教育出版の同じく1年生の176ページ、ここにも銅鏡の大きさということで、どんな銅鏡の破片が発掘されたか、元の銅鏡の形を円と考えて、元の銅鏡の形を作図してみましよう、こういう問題が出ているのですね。

子どもの立場から考えて、学習意欲が喚起されるために、どれが一番いいかなというふうに考えてみたときに、東書の作図しなさいというのは、例3として出てきている、その扱いの違いがありますから一概に言えるわけではないのですけれども、作図しなさいというのはあまりにもストレートに作業指示になっています。

例えば、それに対して、大日本図書の、この円の中心はどのようにそれを求めることができますかというのは、中心をどうやったら求められるかというのは、子どもの疑問の思考過程としてはあまり考えづらい。むしろ、どうやったらこれ復元できるかという考え方が先に立つだろうと。

そういう意味でいうと、教育出版の元の銅鏡の形を作図してみましようという言い方が、子どもの思考回路からすると近いと。あわせて、その下に吹き出しで、円の中心はどこになるのかなというヒントが出されているというのは、子どもが物を考えて、数学的に思考していく過程として考えていったときに、この扱いが一番すっきりするかなというふうに思いました。

先ほど来、各委員から、それぞれの特徴が示されていることとあわせて、こういったことも含めて考えると、教育出版がよりふさわしいかなというふうには思っております。

○**山中委員長** ちょっと私から質問したいのですけれども、例えば、誤答の数などを考えた場合に、単に数が多いというだけの問題ではなくて、その誤答をどう扱っているのか。前にご説明いただいたときに、注意すべき誤答が多いのはこれですよというような形でご指摘をいただいたものがあつたかなと思うのですが、東京書籍だったかなと思うのですが、そういう誤答の扱いについて、数が多いというだけでなく、その誤答の内容を考えての例を事前に出すというか、注意すべき、ここは注意しなければいけないよという、そういうような観点での扱いとしては、各者どうなのでしょう。

○**中山指導担当係長** 誤答の取り扱いについてのことも、東京書籍と教育出版がやはり手厚く、コーナーを設けております。例えば、3年生の東書をご覧いただ

きたいのですが、3年生の70ページをご覧ください。東京書籍の3年生の72ページです。こちらは、二次方程式の解の公式の間違い例がこのような形で、問3の下ですね、間違い例として示されております。

ただ、似たようなところで申しますと、教育出版のほうについては、3年生の76ページをご覧ください。教育出版の3年生の76ページでは、下のほうに「気をつけよう」という形で、どこが間違っているのでしょうかというような問いで、間違いの内容がどんなふうになっているのかというのを問うようなタイプの誤答の示し方になっております。

東京書籍、教育出版ともに誤答の取り扱い是非常に多いのですが、このような、特徴の違いというのはあるかなというふうに思います。

○山中委員長 その違いによって、どういう生徒の影響がありますか。

○中山指導担当係長 誤答の取り扱いについてなので、やはり子どもが考える過程でのつまづきを防止するということを考えますと、いずれも有効なのではあるかというふうに考えておりますが、東京書籍のほうについては、間違い例を示すことによって、同様の間違いを繰り返さないようにする部分、また、教育出版のほうについては、誤答を使って少し考えさせるような内容の示し方になっている特徴があるというふうに小委員会の中でも意見が出ておりました。

○山中委員長 そのほか、さらに意見交換したいと思いますが、ご意見いかがでしょうか。

○池田委員 教育出版で、補充問題のページがありますけれども、これは見る限り、展開としてはおもしろいかなと私も思って、主体的に取り組むかなと思うのですけれども、逆に、生徒たちに負担になってくる。必ず補充問題が出てきて、逆に生徒たちが負担になってこないかなというふうに思うのですけれども、その辺は心配ないでしょうかね。

○中山指導担当係長 補充問題の扱いについては、やはり子どもたちが自学自習をするという観点からも、使いやすい教科書になっているかどうか大切な観点であるという意見は複数出ておりました。

○山中委員長 補充問題の使い方について、子どもたちが、こっちのほうがりやすいというか、そういうような子どもたちから見た場合の受けとめ方としては、補充問題はどこの教科書も結構たくさん扱っているのですけれども、子どもたちから見た場合にどうなのだろうかというのがちょっとよくわからないところがあるのですが。

○中山指導担当係長 東京書籍のほうについては、例えば先ほどの72ページをご覧ください。先ほどの3年生の72ページです。東京書籍の3年生の72ページです。もっと練習という形で補充問題が与えられ、その答えが出てくる形で、本編の中に補充問題が組み込まれているという形になるのですが、

教育出版については、例えば先ほどの3年生で申しますと 81 ページ、こちらの補充問題は 234 ページにありますよという形で、別のページへのリンクが示されていて、子どもがこれを見て補充問題をやりたいなとなるとここに進んでいくというような仕組みになっているのが特徴的かなというふうに考えます。

どちらかという部分については、一長一短はあろうかという話が小委員会ででておりましたが、同じページにあるとすぐ答えが目に入ってしまうという部分もあれば、流れが非常にスムーズで子どもが使いやすいとか、逆に、教育出版のように別ページになってしまうと、なかなか子どもがページをめくってそこまで行くかどうかという部分もあったり、学習の流れが途切れるとか。ただ、答えは同じページに出るこないの逆に見やすいというような意見もあり、こちらも一長一短という小委員会の意見でした。

○山中委員長 今の質疑も踏まえながら、ご意見ありますか。

○設楽委員 今のお話を伺っていて、どちらかというところ、子どもたちの、より学習をしたいという、どうしてなのだろうという疑問だとか、もっとやってみたいという、そういうものを促していくとか、モチベーションを高めていくというのは、さっき東書と言いましたけれども、教育出版のほうが、そういう問題の出し方をしているのかなというふうに思いました。

○山中委員長 結論的には、全体としては、教育出版のほうを選定したらどうかというご意見に収れんしそうな感じですが、さっき迷っておられるというご意見、どっちかといえば教育出版という感じでしたけれども、西村委員、いかがですか。

○西村委員 今の話聞いて、教育出版のほうは私もいいかなと。それは先ほどの補充問題もそうなのですから、東書は、もっとやってみようというのが、あっても1問だったのですよ、実は。教育出版は後ろにありますけれども、質問が出ているということで、問題量からすると教育出版、やろうと思う気のある子にとってはいいのかなというふうに思いました。

○山中委員長 ほかに、自分の意見を補充したいとか、ありますか。

なければ、数学につきましては、教育出版を選定するというところにさせていただきたいと思いますが、よろしゅうございますか。

(「はい」の声あり)

○山中委員長 それでは、数学につきましては、総合的な判断で教育出版ということにいたしますが、具体的な理由につきましては、また後でまとめさせていただきます。

次に、理科についての審議を行います。

理科につきましては、7月 29 日の審議におきまして、東京書籍と啓林館の2者が選定候補ということになっています。これより、さらに今日の審議に当たってもし聞いておきたいということがございましたら、ご質問をお願いいたします。

○西村委員 私、啓林館がいいと思っているのですけれども、実は一番ネックになるというか、子どもにとって、この重さが負担じゃないかなというのが一番のネックで、理科って、もう一つ何か資料集みたいなのを持ちますよね。ですから、この重さがちょっと負担感があるのかなという気持ちがあるのですけれども、何と答えていただけるかわからないのですけれども、どうでしょうか。

○小林指導担当係長 ご指摘のとおりかもしれませんが、重量という点では、そんなに1教科としては、ページ数がちょっと増えているのですけれども、あと啓林館については、マイノートで話ができるというような点、学校としても資料集を持ってくる学校と持ってこない学校もありますので、多分、その辺は学校ごとで工夫されると思います。

○山中委員長 いいですか。

○西村委員 であれば、私は、このマイノートを評価して、啓林館。

○山中委員長 質問をしながらご意見ですが、結構でございます。では、西村委員は、マイノートを評価するというところで、啓林館を選定したらどうかと、こういうご意見。では、池田委員いかがでしょうか。

○池田委員 実は私も迷ってまして、マイノートは、やはり、それは非常に勉強的には進むなということで、とてもいいかなというふうに思う一方、東書の白い粉末ですね、これを区別する方法を話し合ってからというのを非常に気に入ってまして、ちょっと悩んでいるところです。

ただ、やはりマイノートの、これを有効に使うと相当いろいろなことが整理できたりしてとてもいいなという1点に絞ってみたいなということで、啓林館を推したいなというふうに思っております。

○山中委員長 続いて、臼井委員。

○臼井委員 生物分野のことについて、それぞれのところをちょっと見てみたのですけれども、いろいろな発見があって、例えば、東書の中では、3のところの自然と人間のところで、僕たちに非常によく知られているイタドリというのが、日本在来のものであって、それが今、イギリスに渡って、すごくはびこっているなんていう話があったりとか、有珠山の噴火などがあって、そういう意味で非常に興味を引く問題がありましたし、それから、啓林館の場合は、自然と人間という形で、食物連鎖のところで、要するに捕食者とそれを食べられる者というようなことの関係で、生物の数量がどう変わるのかという、こういう三角形、ピラミッドをとっても啓林館はわかりやすいようなことであつたりとか、あるいは今日の放射能で問題になっている生物凝縮というようなコンセプトが啓林館に載っていたりして、その意味で、啓林館のものというのはおもしろいなと思いましたが、それから、でん粉が変わるところで、ベネジクト液なるものを使ってやるということは、東書も啓林館も共通しているのですけれども、啓林館の場合、

その液がどのように変化するかということがあったりとか、メダカの目の働きということも両方扱っているんですけれども、啓林館の場合には具体的なこういう線の入った紙でもってやるとわかりやすいというようなことで、手続が丁寧だということと、それから、あとこれも議論があるところなんですけれども、マイノートという形で、知識の定着、あるいは調べるときのある意味でサブノートの形で載っているというのは非常に便利かなというようなことがあって、啓林館がこの中で考えるとベターじゃなかろうかというように思いました。

○山中委員長 ありがとうございます。続いて、設楽委員お願いします。

○設楽委員 私も啓林館がいいと思いました。それは、これまでの連続性というか、国語でも数学でも、小学校、中学校、さらに高校というふうな連続性を考えていろいろと教科書が工夫されてきたと思うのですけれども、そういう意味では、この啓林館の教科書は、高校にもつなげるというふうな、意識して編集しておられるので、その辺が各委員のいろいろおっしゃるいい点も含めて、そこがいいかなというふうに思いますので、啓林館がよろしいかなと思いますけれども。

○山中委員長 ありがとうございます。北原委員いかがでしょうか。

○北原委員 さっきの数学の問題ではないですけれども、同じような考え方で、例えば啓林館の1年生の161ページ、一番下のほうに、全身を映すためにはどのぐらいの大きさの鏡が必要だろうかというのが啓林館の1年生の161ページ。東京書籍の1年生の137ページにも、全身を映すにはどのぐらいの大きさの鏡があればよいか、角度をもって説明しなさいという、137ページですね。東京書籍でいうと、前のページに入射角と反射角の説明があって、これを考えれば、活用としての問題ですから、このところで応用して考えなさいということではあるのでしょうかけれども、ちょっと説明がなさ過ぎて、子どもにとっては考えづらいかなと。それに対して、啓林館については、入射角と反射角の線が頭のとっぺんのほうに向かっては例として出ています。ということで考えると、考える手だてがそこに示されていて、さらに、この教科書のマイノートの38ページ、啓林館のマイノートの38ページに、さらにこれを詳しく説明している部分があって、考え方をどんどんと深めていくことができる、あるいは、なかなかわかりづらいぞという子どもにとっても道筋がつけられる、そんな取り組みが示されております。という意味でいうと、啓林館がいいかなというふうに思ったところです。それ以外の理由については、皆さんがおっしゃっているとおりであります。

○山中委員長 それ以外は、当然、採択参考資料の観点Aとか、札幌市としての研究項目Bとか、いろいろありましたけれども、そういった点は同じように各者が取り上げている。

今、各委員からご指摘のような諸点から、総合的に啓林館を理科の教科書として採用させていただくという方向にしたいと思いますが、よろしゅうございます

か。

(「はい」の声あり)

○山中委員長 それでは、理科の教科書としては、新興出版社啓林館を選定することにさせていただきます。

続きまして、保健体育について。保健体育につきましては、候補として東京書籍、学研教育みらいの2者が7月27日の審議において選定候補とされました。この中から1者を選定することになります。

なお、これまでの審議、検討等を踏まえて、さらに今日1者を選ぶに当たって、もしこの点を聞いておきたいということがありましたら、ご質問お願いいたします。

特にないようでしたら、審議のほうに入ってまいります。一応、保健体育の場合につきましては、生徒が主体的に学ぶことができるような配慮、あるいは実践的な意欲を高める配慮、実生活で活用できるようなこと、そういった点、それぞれの特色があるように思われますが、そういったことを踏まえつつ、ご意見をちょうだいしたいと思います。

それでは、これについては、臼井委員から。

○臼井委員 学研のものと、それから東書のものなのですけれども、率直なところで申し上げますと、両方ともほとんど同じような教科書というようなところの判断なのでありますけれども、この東書のほうの一つの特色を見ていくと、一番最初のところで、全体の、例えば、スポーツと用具というものがあったり、それから私の仕事という形で、そういう意味では非常に身近なところからの入りができるかなというところがあります。扱っているテーマということは、両方とも当たり前の話で共通しておりますけれども、この保健の分野のところでもって、自分たちに身近な健康であるとか、あるいは食であるとか、そういうようなことをまず自分たちも一応身近なところから入っていくというところが、入りやすい、近づきやすいということで、強いて挙げれば、東書のほうにプライオリティーといいますか、優先権があろうかなというふうに思いました。

○山中委員長 続いて、設楽委員をお願いします。

○設楽委員 私は、体育のほうはあまりよくわからないのですが、主として保健のほうで両方の教科書を見てみました。やはり記述は学研のほうが適当かなというか、穏当かなというふうな気がいたします。例えば、異性への尊重と性情報への対処と、それは東京書籍の14ページと、それから学研の16ページ、これはともに思春期を迎えた性についてどういうふうに考えていくかということなのですが、学研のほう記述はすっきりしていますね。結構、未成年者の性犯罪であるとか、児童の買春であるとか、そんなことが今トピックスというか、非常に重要な話題になっていますので、そういう意味では、このようなことをちゃんと正

面から扱っているからいいかなというふうに思いましたけれども、例を挙げれば。
○山中委員長 ありがとうございます。西村委員はいかがですか。

○西村委員 私も甲乙つけがたいなというふうに思っていたのですけれども、例えば、震災があったということで、自然災害に備えてというような分野で、ちょっとあまりにも差がないので比較してみたのですけれども、学研のほうは、自然災害の写真が出ていて、今まで見てきたような写真が出ているわけなのですけれども、東京書籍のほうはイラストで、写真は小さく出ているのですけれども、そんな感じで、自然災害に関してだけ言えば、学研のほうがインパクトがあって、より身近に感じられるかなと。

それとAEDのところなのですけれども、こちらは、今度は東京書籍が写真で人形と人なのですけれども、学研のほうはイラストだけということで、どっちがいいのかなというふうに、これは実際の写真で見たほうが私は好きなのですけれども、これも個人差があるのかなということで、あまり差はなかったように思うのですけれども、ちょっと悩んでいるところです。

○山中委員長 ところで、指導主事の方にお聞きしたいのですが、今の部分では、写真を扱っているのは東書のほうだと思いますが、全体としては、写真とかイラストを使っているのは学研のほうなのではないかと思います。

○佐田指導担当係長 両者とも、各項目それぞれにおいて写真であったり、イラストであったりということで、数自体の総体でいくとそんなに大きな差はないなと思います。

○山中委員長 この場面ではA者のほうがいいけれども、ほかではB者のほうがいいみたいな、そんな感じがある。

○佐田指導担当係長 項目によってということになるかと思います。

○山中委員長 池田委員、いかがですか。

○池田委員 私も非常に悩んでおりまして、特に環境のところについて、札幌市の調査研究項目ですけれども、環境のところを少し見させていただいたのですけれども、内容的にはほとんど同じような形かなというふうに思いますけれども、目に飛び込んでくる印字とかレイアウトとかを含めると、やっぱり学研のほうわかりやすい字で示しているなというふうなこと。それから、そういう部分にしても、健康にどう影響を与えるかについても、学研のほう非常に読み取りやすいかなと、こんなふうに感じて、私は学研のほうを支持したいなというふうに思っております。

○山中委員長 北原委員お願いします。

○北原委員 先ほど西村委員のほうから話がありました自然災害のところでもっと比較をさせていただきたいなと。例えば東京書籍について見ますと、60ページから自然災害の1次災害と2次災害ということで載ってまして、自然災害

による傷害の防止ということが取り組みで出てきています。そして、具体的にどうしていくかということで説明があるわけですが、これを学研のほうで見ますと、まず、口絵写真のほうで学研は自然災害について、口絵写真の4で自然災害に備えてという部分が出てきて、ここで肉づけをしておいた上で、58ページから自然災害に備えてということで、具体的に自然災害発生時の行動あるいはその前の備えについても具体的に書かれていて、さらに、ずっと進んでいって、68ページに自然災害への備えということで、防災チェックの例が出ています。さらに調べてみましょうとか、やってみましょうということで実際に活動を促していくような、主体的な取り組みにまでつなげていくような展開が示されている。そういう意味でいうと、主体的に学んでいく、それをどう助けるかという意味でいうと、学研のほうがこの関係からしていくとすぐれているかなというふうには思っただけです。

○山中委員長 この点も多少意見がありますが、それぞれのご意見を伺って、さらにご意見をいただきたいと思っておりますけれども。

白井委員は、東書かなというようなことをおっしゃいましたけれども、今の学研がいろいろ自然災害というような関係でいかがですか。

○白井委員 私、さっき最初の部分でということをも1つ挙げたのですけれども、東書の部分もこれよりもっと大きなポイントかもしれないけれども、各章ごとに確認の問題というのが載っていて、この部分で知識の定着を図れるという点でも、東書に1つメリットがあるかなと思っているのです。その一方で、さっきはほとんど同じぐらいの距離だという話もしたのですけれども、例えば、ストレスと心の発達、あるいは欲求不満やストレスの対処という部分について比較すると、そうすると学研のほうで、いわゆるストレスコーピングですね、ストレスに対する対処法ということでは、具体的な手だてということも含めて、こっちではむしろ内容が詳しく具体的なのです。

そんなことを考えてみても、違うところ、それぞれ違いはあるけれども、別な委員からの話もありましたけれども、各論になると学研のほうで、例えばここで詳しい話を挙げましたけれども、ストレスの問題になると学研のほうで具体的な詳しいということもありましたので、その意味では、私の最初の判断というのはわずかな違いでありますので、それにこだわるということはありません。

○山中委員長 たしか採択参考資料の関係でも、学研が、ちょっとどこだったかな、私もはっきりした記憶がないのですが、たしかどこかに、学習内容を深めたりすることができるように丁寧に導いていくようなものが、前の採択参考資料のほうだったか、札幌市の研究との関係だったか、ちょっと覚えていないのですが、どこかそういうのがありましたよね。

○佐田指導担当係長 答申の中でAについて、小委員長の方から意見がございま

した。

○山中委員長 北海道の採択参考資料の観点Aのほうで、そういうものが特徴であるというご指摘があったのですね。そんなことも考えますと、今、臼井委員からも、各論になってくると記述がより詳しいというようなお話もございましたし、この点については、学研教育みらいのほうを総合的に選定するという方向でよろしいでしょうか。

(「はい」の声あり)

それでは、保健体育につきましては、学研教育みらいのほうを選定するということとさせていただきます。

具体的な理由については、また整理いたしまして、8月10日の審議にかけたいと思います。

続きまして、英語につきまして審議を行います。

英語については、前回7月29日の審議におきまして、東京書籍、開隆堂出版、教育出版の3者を選定候補としております。今日の審議に当たりまして、ぜひこの点を再度質問しておきたいというようなことがありましたら、お願いいたします。

○臼井委員 今度、新学習指導要領では、英語の学習時間というのは、年間大分ふえるわけですけれども、それで各教科書の3年目で見ていましたら、パラグラフリーディング、つまり発展的な読みというのを最後の3年度に入れているのですけれども、実際には、これは選択的なものというより、必ずみんな学ぶというぐあいに考えてよろしいでしょうか。

○大道指導担当係長 子どもたちの状況にもよるかと思うのですが、発展的な内容として扱うことが多いと思っています。ですから、すべての学校で、すべての子どもたちに指導するというよりも、いろいろな状況を見ながら、必要に応じて、その部分について触れていくというふうな使い方になるかと思っています。

○山中委員長 ほかにございますか。

特になければ、審議に入ってまいります。前回までの審議の経過等を見ますと、英語の場合には、小学校、特に今回小学校の外国語活動というのが入ってくる関係もございまして、それとのつながり、また、北海道、札幌とのかかわり方、そういった問題、それから、コミュニケーション活動の取り扱い、そういった観点で各教科書の特徴あるいは違いというのが見られるかと思っています。そういったことを踏まえつつ、ご意見をいただければと思います。どなたからでも結構です。いかがでしょうか。

それでは、指名をさせていただいて、順次ご意見を伺っていきたいと思います。さっき、私、池田委員を飛ばしたように思いますので、西村委員が意見を言ったので、いいかと思って、それから続けていったのですが、池田委員いかがですか。

○池田委員 僕も一番悩んでいる教科書でありまして、特に、小学校からの外国語での活用につながるという意味では、開隆堂がゲームの要素とか取り入れたりしている点が非常にいいなというふうに思っているが、ただ、ほかのところも同じようにそういった点もありますので、甲乙つけがたいなと悩んでおります。

開隆堂と教育出版の、北海道を取り上げている、どれだけ親しみがあるかのちょっとしたとっかかりも大事かなと思って、その点を見てみると、地図と雪祭りとありますけれども、教材としては地図のほうが展開がしていきやすいのかなと思ったりもしていることも1点あり得るのかなと思っています。

それから最後に、開隆堂が、いろいろな物語が非常に豊富で、本来の英語を学ぶ目的みたいなのが、物語を読んで知識を深めていくための一つでもあると思います。少しでも英語が使えるということでも開隆堂がいいかなというふうに思っております。

ただ、教育出版とドングリの背比べかなと思っていますから、あえて言えば、開隆堂かなというぐあいに思っております。

○山中委員長 ありがとうございます。それでは、臼井委員のほうから。

○臼井委員 ちょっと注目したのは、1年生のときが、小学校のときから中学校、新たに勉強するので、特に日本語と違って音と文字との対応関係というのは、英語では非常に例外的に多くなるので、その辺がどのぐらい丁寧になっているかなという点で見ましたら、教育出版の場合には、最初にイントロで「Spring board」というところがあって、導入が丁寧だということと、あと辞書を引こうということの具体的な辞書の引き方ということここが一番丁寧に書いてあったかなという気がしました。

また、開隆堂のほうも丁寧で、アルファベットで遊ぼうというようなところがあったり、この辺のところ、比較的2つのところが入りやすいかなと思えました。

その一方で、3年生の場合に、今度高校につながるということと、義務教育の最後だということで、特に発展的な読みの部分ということで3者みんなあわせて読んでみたら、それぞれのところが読みごたえがあって、正直おもしろかったです。

特色で言うと、教育出版の場合は、Project というところで、例えば給食派がいいのか、お弁当がいいのかということのディベートをやってみようとか、あるいは、環境問題についての新聞をつくってみようとか、そういうように英語を身近ないろいろなものにつなげている点では、すごくある面ではおもしろかったです。

それから開隆堂の場合に特色あるなと思ったのは、読み物の中で、日本のアニメで「鉄腕アトム」が入ってきたとか、あるいはイギリスで活躍している日本人

の帽子のデザイナーの話だとか、あるいは伝統的な日本文化を英語で伝えるにはどうするかというようなことなどがあったり、また、札幌の地下鉄の路線図が、子どもたちの中で地下鉄の路線図を見ながら旅行者と通行人のペアになって自由に会話しようというようなことがあったりして、これはやっぱり会話の練習といっても、自分たちとあまり身近でないものだとなじまない話ですけれども、その辺の工夫があって、さっき言った、今、伝統文化を英語で伝えるという点で国際理解ということにも随分力として大きく育てる面にかかわるかなという気がしました。

また、東書の場合も、巻末読み物の中では、この中で「葉っぱのフレディ」が入っていたりして、これなんかは非常に音韻がいいので、子どもたちで読み合わせるとおもしろいかなと思ったりしましたし、また、落語家の桂かい枝さんの「笑いの大使」というところでインタビュー記事があたりして、これはこれでおもしろいかなという気がいたしました。

等々を考えると、開隆堂が一番ある意味で北海道の子どもにとって、札幌の子どもにとってもなじむということと、それから、ここは会話が比較的多いので、コミュニケーションの力という点でも、ちょっと特色があるのかなという点で、開隆堂を1番に推したいと思います。

○山中委員長 ありがとうございます。それでは、設楽委員。

○設楽委員 各委員がおっしゃっていた、教科書としてどれが適当か選ぶというのはすごく難しいというふうな印象があります。今もって、ちょっとよくわかりません。というのは、小学校で今外国語活動をするようになったわけで、そのときにポイントとなるのは中学校での英語の教育で、ポイントとなるのは音から書くこと、文字、そういうものに結びつけていくことだというふうなお話があって、そういう意味で見てみたんですが、各者とも、先ほど臼井委員からもお話ありましたように、いろいろ工夫をされて、それは教科書で大きな差が出るよりも、むしろどうやって先生方がその教材を生かして、各生徒の関心を英語に引きつけていくかというところにあるかなというふうにも思いましたので、ちょっとその辺も、どれがいいかということがわかりませんでした。

判が大きいので、開隆堂が見やすいというか、そういうことがあって、読みやすいというのは一番読みやすく、その辺というのは全く学問的ではないのですが、開隆堂が見やすいというところで、すみません、それ以外にあまり差がわかりませんでした。

○山中委員長 ありがとうございます。西村委員いかがですか。

○西村委員 私も各者比べてみましたけれども、いろいろな読み物があっておもしろかったり、いろいろな工夫がされているなと思いました。

その中で、開隆堂なのですけれども、教科書のつくりが、各プログラムの最初

のところに、やってみよう、聞いてみよう、使ってみようというのが最初にあって、左側のページにあって、右側のページに本文があるというような、ちょっとほかの2者とは違う形の型式になっている。これが小学校で学んできた音から入るところでは、これが生きるのかなというふうに1つ思いました。

それと先ほども言っていましたけれども、札幌市の地下鉄の路線図を載せて、それを使ってやるということで、英語を身近ですぐ使えるようになっているというか。

それともう1つは、観点A、観点Bの両方で名前が挙がっていたのがたしか開隆堂1者だったと思いますので、開隆堂がいいかなというふうに思いました。

○山中委員長 ありがとうございます。北原委員。

○北原委員 辞書について書かれている教育出版について、1年生の36ページに辞書を引こうというのがあるって、会話等の学習が進んでいったところに辞書を引こうがありまして、臼井委員がご指摘のところかと思えます。

開隆堂でいうと23ページに辞書を引いてみようが、つまり会話や何かの学習が始まる前に入っていて、実際の使い勝手からすると、このあたりかなというふうにも思いました。

教育出版でいうと、かなり詳しく述べられているのですが、このあたりについて、難しいのいいという考え方もありますけれども、教師側でカバーできるかなというふうに思いながら見させていただきました。

あと気になったのが、自己紹介をどうするか。当然フレンドリーな関係の中では、アイムアヤとかという言い方が出てきていますけれども、そういうファミリーネームをつけずに言うところはずっと追っかけていくのもありますけれども、例えば、開隆堂でいうと、例えば25ページに、右側の枠外のところに囲みで、日本人の姓名を英語で言ったり書いたりするときには二通りありますよということで、姓名の順番で言うのと、名姓の順番で言うのがある。これがあって、実は東京書籍のほうにもこの説明は同じように上がっています。これは東京書籍のほうで25ページの下のほう。教科書では姓名の順番で扱いますよという説明。教育出版は、その説明が実はちょっとないようです。実際の会話の中では、アイムではなくて、アイムという省略の仕方についての説明という意味でも、開隆堂あたりは丁寧に説明をしているかなというふうに思っていたところです。

そんなことを含めて考えていくと、今ほかの各委員の方々がおっしゃったこともあわせて、開隆堂がより取り扱いやすい中身だったかなというふうには思いました。

以上です。

○山中委員長 ありがとうございます。皆さんのご意見が出たところで、さらに補助的につけ足して意見を述べたいとか、ございませんか。

特にならなければ、英語につきましては、皆さんの意見でいろいろな観点からご指摘ございましたけれども、意見としては開隆堂のほうがよろしいのではないかとこのところですから、英語については、開隆堂を選定するというようにしたいと思いますが、いかがですか。

(「はい」の声あり)

では、そのようにさせていただきます。

選定の理由につきましては、また整理させていただいて、次回の会議にかけます。

それでは次に、技術・家庭の技術分野、家庭分野についてですが、選定の候補は、技術分野につきましては、東京書籍と教育図書、それから開隆堂出版、家庭分野につきましては、同じ東京書籍、教育図書、開隆堂出版になります。7月27日の審議におきまして、いずれもこの3者を選定候補とするということになっております。今日の審議に当たりまして、さらに質問しておきたいということがございましたら、ご質問ください。

特になければ、引き続きご意見を頂戴するという事で審議に入りますが、技術分野の場合ですと、技術と社会・環境のかかわりの観点、また実践的、体験的な学習というような観点におきまして、各教科書の特徴や違いがあらうかなと思いますし、家庭分野では、家庭生活と地域のかかわりの観点や、興味・関心を高め実践的な態度を育成するというような観点で特徴があり、また違いがあるかというふうに思いますが、そういった観点につきましては、皆さんからご意見をちょうだいしたいと思います。

西村委員からお願いしたいと思います。

○西村委員 あまり差を感じる事ができなかったのですが、ちょっと質問させていただいて、今までは技術・家庭科が違う会社になったことはない。

○長谷川指導担当係長 現在は東京書籍と同じですが、平成14年から18年までの数年間は、技術科と家庭科が数年間違うことがございました。

○西村委員 今は技術・家庭、両方。

○山中委員長 両方を進めてまいります、それぞれについてのご意見をいただければと思います。1者にしたほうがいいのか、あるいは別でいいのではないかと、その辺のご意見もあるかもしれません。

○西村委員 技術・家庭科という教え方なのですからけれども、先生が多分1人1人ぐらいですよ、各学校。ということは、1年生で技術だけ、家庭科だけというわけではなくて、半分ずつするという事ですね。同じ学年の中に技術をやる時間もある、家庭科もやる時間もあるということですのでよろしいですね。

○長谷川指導担当係長 技術と家庭科につきましては、各学年で時間を半分ずつというところまでは決まっておりますけれども、多くの学校が技術と家庭科を

1年間でそれぞれおよそ半分ずつバランスよくやっているというのが実情でございます。

○西村委員 子どもたちの認識としては、技術・家庭という一つの分野と考えるのか、技術科と家庭科という認識なのでしょうか。それによって教科書が一緒の会社がいいとかという考え方もあると思うのですけれども。

○長谷川指導担当係長 技術科の担当教諭と、それから家庭科の担当教諭がそれぞれ1人ずついる学校も今はございますけれども、1学年4クラス規模の学校になりますと、現在、技術・家庭科を1人の教員がどちらの分野も教えるというようなことが実態としてはございますので、1人の教員が教えている分には、子どもたちは一律技術・家庭科というような形で受け入れている場合もございますが、先生がかわると教え方が違うので、技術分野の授業、家庭分野の授業ということで、ちょっと子どもたちの認識に違いはあるのかなと思っています。

○西村委員 私は見ていて、技術と家庭科が同じ会社のほうが、いろいろな注釈のものですとか、それから後ろの、要するに装丁とかが似ているので、技術と家庭科同じ出版社がいいのかなというふうに考えたのですね。それで見ていたのですけれども、総合的に見ると、やっぱり東京書籍がいいのかなと。なぜと言われるとちょっとぼんやりとした理由でしかないのですけれども。

○山中委員長 内容がでなくて、印象ということ。

○西村委員 そうですね。

○山中委員長 その中で、多少でもご指摘いただけることがあれば。

○西村委員 場所を探さなければ。

○山中委員長 後にしますか。

○西村委員 はい。

○山中委員長 池田委員いかがですか。

○池田委員 私は、興味をどう子どもたちが持つかという観点からいろいろ見てみた中で、開隆堂があちこちに、観察してみよう、調べてみよう、ほかに学習を振り返る、生活に生かそうというところが随所にあります。それはとても引きつけるような内容になっていて、とてもいいなというふうに思っておりました。ただ、それと家庭と結びつくかどうかという点はまだ考えておりません。

○山中委員長 それ、技術のほうの話ね。

○池田委員 技術の話ですね。それから、開隆堂の場合、具体的な豆知識でしたかね、それが結構多く出されていたり、それから、そんなようなところでは、中身も非常に充実しているなというふうに思いましたので、開隆堂がいいかなというふうに思っております。

○山中委員長 家庭のほうは。

○池田委員 家庭のほうは、やはり札幌市の調査研究項目の中にあります、家庭

生活と地域とのかかわり合いについてのところを見て、具体的な子どもたちの触れ合いの実践例が、東京書籍もあったのですけれども、開隆堂のほう飛び込んでいきやすいかなということで、開隆堂のほうを薦めたいというふうに思っております。

○山中委員長 ありがとうございます。臼井委員いかがですか。

○臼井委員 私は、技術科のところは、生物育成というところを主に見てまいったのですけれども、そうすると、教育図書の場合には載ってなくて、あと東書と開隆堂が載っているのが稲の部分なのですね。稲というのは、何といたっても日本人にとっては身近な栽培植物でありますので、そんなことで、単純な話ですけれども、東書でというところを支持して考えてみたら、開隆堂にメリットがあるのは、この育種の部分に限らず、いろいろなことの例が詳しいということなのです。それからもう1つ、各ページの右のところに、栽培であればじょうろの絵があったり、それから実習例のところに噴霧器があったりとか、土壌酸度計があったりとか、こんなふうにして身近な道具というのが各ページの右のところに載ったりして、生徒にしてみると、いろいろな具体的なものにぱっと関心を持てるという工夫がなされていていいかなと思ったのです。

その一方で、東書のほうを見ますと、トマトの栽培のところは、これは小学校の低学年でやることはやると思うのですけれども、かなりここでは一番身近なものについて結構詳しくやっているというところがあるので、今言ったような全体のところを見ると、正直なところ、差がほとんどないということで、強いて言えば開隆堂のほうがいいかなという程度です。ですから、ほとんどこれは差がない。

家庭科のほうなのでも、ここでもって、開隆堂のほうは表紙のところの続きで、日本全国の郷土料理の一覧というのがあって、こんなに料理があるのかなということと、それから、私にもできることがあるということで、子どもたちが地域とのつながりということで、地域参加というようなこと、それから、学習の全体像ということになっているという点で、とても入りやすいと思いました。

それから、東書の場合には、小学校とのつながりということが最初の11ページのところになっていて、小学校の家庭科で学習したこと等が中学校での学ぶことということの、こちらもそういう意味でリンクがなされているなと思いました。

主に見たのは、開隆堂でいうとA分野、東書でいうと3編というところなのですけれども、家庭と子どもの成長というところを中心点にして見てみました。開隆堂の場合にいいなと思ったのは、話し合ってみようということでいろいろな材料についての具体的な話し合いのトピックスがあったり、資料があって、この資料について考えてみようとか。それから、やってみようという形で、実際、幼児を観察したり、インタビューするときのやり方なんかあったりとか、そんなとこ

ろで、かなり具体的な教育活動ということについて触れているというところはよかったです。

その一方で、東書の場合も、実習例としてロールプレイングの話として、親子の価値観、親子の関係でなかったかと思うのですけれども、そんなものがあったりしたんですけれども、全体として見てみると、開隆堂のほうが具体的なところがあって、指導のステップがより細かく明確だという点で、開隆堂のほうがよろしいかなということをおもいます。

○山中委員長 次、設楽委員。

○設楽委員 技術分野に関してですけれども、実は、教科書を見て、あまりにもたくさんの中を中学3年間でやるのだなというふうに改めて感心して、その内容というか、圧倒されたんですが、中を見ていくと、比較的開隆堂は随分実習例が多かったり、それから、結構いろいろな知識、ちょっとした知識をたくさん記載しているという意味では、ちょっと違う。何か東書や教育図書と違うかなというふうに思いました。

それから、家庭科に関しては、まず開隆堂が、この見開きのところで、自立を目指して学ぼうという技術・家庭の一番目標というか、そういうことなのだろうと。自立に向けてというところから始まって、共生というふうな、ともに生きるみたいなことを掲げて、内容は同じなのですが、そういう意味では、家庭科でこういうことをするよということが明確に書かれているなというふうに思いました、中は同じように詳しく甲乙つけがたいですが、そういう家庭科の方向というか、そういうものは先に明確に示しているという点ではわかりやすかったです。

○山中委員長 ありがとうございます。西村委員、具体的なご指摘は。

○西村委員 すみません。先ほど私慌てていまして、間違えました。私、いいなと思ったのは開隆堂のほうでした。すみません。その理由は、やはりコラムが充実しているということ、両方とも、家庭科もそうなのですけれども、技術科もコラムが充実していて、家庭科とか技術というのは、要するにやってみることはほんのごく一部なのだけれども、実生活の中にいっぱい素材があって、それをいかに自分の学んだことと実生活を結びつけていくかということが大切だと思うのですけれども、コラムなんかを読んでいると、非常にそれがよく、こんなこともあるのだと気づかされるということで、コラムが非常におもしろかったというのが開隆堂でした。すみません。

それと、この前の指摘の中にもありましたけれども、幼児と触れ合う体験、これからこれが一緒になってくるということで、開隆堂が4つの例が出ていて、子育て支援センターや児童館に行ってみようということで、学校に招待する、行くという、写真を見るときかビデオを見るときかということだけではない新たな視点というか、そういう点が盛り込まれているということで開隆堂がいいかなと思いま

した。

技術に関して、何とも言えないのですけれども、私はなるべくなら一緒のほうがいいかなと思うので、こちらも開隆堂というふうに。

○山中委員長 北原委員、さらにご指摘ございますか。

○北原委員 技術分野について言うと、今、本当にこれから考えていかなければならないことはエネルギーがあるのだろうと。エネルギーについてどういうふう
に記述しているかと各者比較してみますと、開隆堂は 96 ページあたりから、長
所と課題みたいなことの分析というのはあまりないのですね。原子力発電につい
てはあまり触れられていない。教育図書について言うと、これが、88 ページから
エネルギーをつくり出すということを出てきていて、92 ページあたりに原子力発
電所の仕組みまで出ていて、その下に長所と短所というのが出てきています。原
子力発電の長所で、使い終わった原料を再利用できるという大前提でこれを言っ
てしまうことができるのかなとちょっと疑問だったのですが、そんな記述があっ
て、最後、東京書籍で見ますと、100 ページからあるのですけれども、その 100
ページでは、各種発電方式の特徴、二酸化炭素排出量、具体的にキロワットアワ
ーに対して何グラムの二酸化炭素排出量なのか、それから費用とか、それから原
子力発電についていうと、安全性に関して特別な配慮が必要であるとかといった
説明があったりして、バランス的にいうと、この部分に関して言えば東京書籍か
なというふうに思っております。

東京書籍を見ていきますと、最初の口絵のあたり、8 ページ目ですが、身の回
りの技術を身につけようということ、身近な生活の中で技術がということを考
えさせながら先に進んでいくというあたりで、それは家庭科でも同じように、東
京書籍について言うと、これも 8 ページですね、生活や学習を振り返ろうとい
う中に、自分たちの具体的な生活の中にどうかかわっているのかというあたりが記
載されていて、その後ろ、12 ページ、チェックしようということ、どんな自分
になりたいかという 3 年間見通して、どんなことができる自分になりたいで
しょうかというあたりで、3 年間見通した学びということが意識されているとい
う意味では、この辺すぐれているかなというふうに思っで見させていただきました。
そういう意味で、技術分野、家庭分野について、両方とも東京書籍に特徴が
ある程度顕著かなというふうに思ったところです。

以上です。

○山中委員長 今の北原委員のご指摘の関係、ほかの方がいかがでしょうか。

○臼井委員 私も最初るとき、メモでは、このエネルギーのことは東京書籍が一
番詳しいと書いてあったので、今、教育長が言われたことに、私もその点では同
意いたします。

○山中委員長 教科書の作成時期との関係とかはあるのですか。3.11 以前に各

者みんな作って。

○北原委員 作成されているのは、それ以前だと思います。少なくとも、この4年間継続して使用することを考えると、このことについてきちんと考える機会を持てる教材であってほしいなという、正直な気持ちとしてはございます。

○設楽委員 そうですね、そのとおりだと私も思います。

○西村委員 理科の分野では、このエネルギーの扱いは。

○山中委員長 たしか理科でもありましたよね。

○西村委員 理科でも、たしかエネルギーのところがあったと思うのですけれども。

○小林指導担当係長 理科につきましては、今回、学習指導要領の中で、内容の取り扱いで、放射線の性質と利用にも触れることと。その意味が書いてありまして、今までのこと等を加えて、例えば水力、火力、原子力、太陽光などによる発電の仕組みやそれぞれの特徴について各教科書で触れています。また、原子力発電がウランなどの核燃料からエネルギーを取り出していることや、また、放射線が透過性を持って、医療などで利用されていることについても触れております。

○山中委員長 北原委員は、この2つの分野で分けるというようなことではいかななものというふうに。

○北原委員 分けるといいますと。

○山中委員長 教科書が。

○北原委員 教科書会社をわけることについては、特に問題はないというふうには、私自身は思っています。

○山中委員長 北原委員からエネルギー問題について、大きな問題のご指摘がありました。もう少し皆さんからご意見をいただきたい。

○北原委員 先ほど、理科について言うと、啓林館ということでしたから、啓林館の理科の原子力発電にかかわる記述について、その資料が、どこにどんなふうにというあたりをもう一回ちょっと説明をいただけたらと思います。

○山中委員長 お願いします、啓林館の記述。

○小林指導担当係長 啓林館の教科書につきましては、170 ページからです。170 ページの中で、エネルギー全般について載せられて、171 ページでいろいろな発電方法について触れてあります。それで先ほどの出た放射線の性質について、173 ページのほうで触れてあります。

○山中委員長 こちらで触れていればいいということにはならないでしょうけれどね。その辺、ご意見いかがでしょう。

確かにご指摘のとおりであり、大変大事な問題であって、エネルギー問題に関して扱いながら、何も原子力に触れないでやっていくわけにはいかないということがありますが、しかも教科書を4年間使うと。

○西村委員 技術・家庭科で扱うエネルギーの問題と理科で扱うエネルギーの、その視点の違いというか、そういうのはあるのですか。

○長谷川指導担当係長 技術科におきましては、Bのエネルギー変換に関する技術の内容の部分で取り扱うことになっておりますが、内容につきましては、石油などの化石燃料、原子力、水力、風力、太陽光などの自然界のエネルギー資源を利用している発電システムの特徴を知ることができるようにすることということが示されております。

先ほど教育長のご指摘ありましたように、各者とも発電に関するさまざまな自然エネルギーの利用ということで載っておりますけれども、開隆堂におきましては、97 ページに発電別エネルギー変換効率と発電時のコストと設備、利用率ということで原子力を取り上げております。東京書籍のほうでは、火力発電、原子力発電、水力発電、風力、太陽光発電ということで、特徴や課題、それから費用ということで表になって掲載されておりますので、教育長ご指摘のように見やすい形にはなっております。教育図書におきましては、92 ページに原子力発電所の仕組みということで、いわゆるテレビでよく放送されております、あの図があって、原子力発電所の構造がそのまま載っているということで、それぞれ特徴はありますが、いずれにいたしましても、自然エネルギーをどのような形でエネルギーに変換するかということが、例としては取り上げられているというふうは言えると思います。

○山中委員長 どこまで取り上げるのが望ましいかという問題になってくる。システムだけ資料でいいということなのか。理科の問題は、その点はどのような点で。

○小林指導担当係長 理科のほうでは、今のエネルギーという視点、プラス、今回、先ほどお話ししましたように、放射線の性質と利用、それがどのように科学技術の分野に生かされていくのかの視点であるとか、また、放射線が自然界にも存在したり、あと放射線の具体的な性質、透過性があるということ、あと医療などで利用されていること、そのようなことについて触れるように学習指導要領の中で示されております。

○北原委員 啓林館の理科の 173 ページ、例えば原子力発電の仕組みについての図は上のほうに、173 ページの上のほうに具体的に示されて載っています。そういう意味でいくと、教育図書が示している図と重なるのもある。それは別に必ずしも必要ないのかもしれませんが、ただ、発電に関する変換効率という観点だけでこれを語っているわけには、今の時代、もういなくなるだろうと思うと、少なくとも、この点に関してだけ言うと、開隆堂のこの部分の記述がちょっと物足りないかなという気がします。

○山中委員長 メリット、デメリット、危険性含めて、そういうところを教える必要があるのかなと思います。

○**設楽委員** 開隆堂の132ページに多少の記述はありますが、不安を持ったり、事故の発生を危惧したりする面もありますという、非常に軽い書き方ですので、そういう意味では、実際に今回の大きな事故が起こっている現状では、もう少し踏み込んだ部分の議論があつていいかなというふうに思いますね。

○**山中委員長** 4年間の間にいろいろこの問題についてどう進展していくのかというのはありますけれども、そういうことを中学生になって意識していくというための素材になるような教科書である必要は考えたほうがいいのかなと。

さて、どうしますかね、そうすると。今のエネルギー問題のところが出る前には、一応、北原委員の話がある前は開隆堂という形になっていたのですけれども、そのエネルギー問題について、ちょっとやっぱり考えておくべきかなと思いましたが、池田委員どうですか。

○**池田委員** 全体としては、やっぱり興味を引くという意味では開隆堂のほうがすぐれているかなというふうに思うので、その点と、そこをどうクリアしていったらいいのかなというのは感じているところですが、いずれにせよ、やっぱり開隆堂のほうが、私、何か引き込むもの、幾つかやっぱり技術家庭にはあるなということを考えるのですね。

もう一つは、質問したいと思うのですが、家庭分野の開隆堂では、59ページのほうに自分の将来とか、家庭分野から始まって、高校を卒業する自分へとか、そういったものがとてもいいなと思ったりする。これは、同じように東京書籍ではそういうところがあるかどうか、ちょっといろいろ調べてみたのですが、わからなかったもので、もしあれば、教えていただきたいなと思ったのですが。

○**長谷川指導担当係長** 東京書籍のほうにつきましては、先ほど教育長からご指摘ありましたように、12ページ、13ページのところで3年後の自分についてということで、すべての内容に関してということがございますけれども、私の記憶の中では、「A 家族・家庭と子どもの成長」のところで、これに特化した同じような内容はなかったと考えます。

○**池田委員** ありがとうございます。

○**山中委員長** そのほか意見の補充はございますか。

○**池田委員** このことはとても大事だなと。逆にこれはすごく推すべきところかなと思って。やってきた成果の中、それを自分の将来に反映させていくチェックポイントして使えるのではないかと。開隆堂のいいところかなというふうに感じました。

○**山中委員長** 考え方として、エネルギー問題に関して、もう少し突っ込んだ形の指導、教科書としていく上で、理科のほうでこれを扱っていくように札幌市として指導していく、教科書としては開隆堂をお使いになるというやり方も一つあ

るのかもしれない。それから、やはりここは技術・家庭科においてもきちっと指導していくというふうに、教科書自体にもそういう記述があるほうが望ましいということで、これを採用する。だけれども、家庭のほうにおいては、皆さんの意見の多いほうの開隆堂、エネルギーの関係では東京書籍と。エネルギーというか技術分野というようなやり方と思いますけれども、その辺について皆さんいかがでしょうか。

○北原委員 補足しておきますと、教科書ですべてをとというふうに必ずしも考える必要はないというふうに規定するのであれば、例えば、この後いろいろな業務の中で新たな観点での資料等が出てきて、このレベルよりももっときちんとした資料が必要になってくるかもしれない。出てくるだろう。とすると、ここですべてを求めるのではなくて、そういう補助教材的なものを今後どのようにしていく、そういったことについて、札幌市としてきちんとやっていくんだぞということの確認さえできれば、必ずしもここに全面的な記述が、ほかの者にしても、必ずしも全面的にきちり十分な記述になっているかということ、きっかけになるというレベルのものでしょうから、そういう意味でいうと、いずれにしても、中のほうで検討が必要になるでしょう

○山中委員長 東京書籍の記述自体が3.11を踏まえてのものではない。また、その後のいろいろな新しく判明する事象を踏まえてどうするというのも考えているわけじゃないし、その部分だけで全部対応できるわけではないので、むしろ副読本か何かを考えると、指導上の工夫をするということが大事なのだろうと。

○北原委員 それを前提に考えると、それをあまりにも否定して考えていく必要はなくなるかなというふうには思います。

○山中委員長 しかし、そこは非常に大事なところだと。そこは押さえておく必要があると。

○北原委員 今後、教科書をどう採択するかは別の問題として、札幌市として今後どう学習指導を進めていくかということについて、そこに十分留意するという前提のもとであれば、必ずしもこの記述に固執する必要はないのかなというふうには思いました。

○山中委員長 そうしたら、この技術・家庭につきましても、全体的な、総合的な判断としては、開隆堂の教科書を採用するとしながら、原子力、エネルギー問題に関して3.11の震災等を踏まえたときに必ずしも十分とは考えられないので、その辺については、教育委員会として教科書について十分検討し、各学校にお願いといいますか、情報提供等をしていくということを前提として、開隆堂を採用するという方向でいいですか。よろしいですか。

(「はい」の声あり)

○山中委員長 では、そのようにさせていただきます。
それでは、ここで10分間休憩をしたいと思います。

【休憩】

○山中委員長 それでは、審議を再開いたします。

次は、社会の審議に入りますが、地理的分野から進めてまいります。

地理的分野につきましては、7月27日の審議におきまして、東京書籍、教育出版、帝国書院の3者を選定の候補にしておりますので、この中から1者を選定するという事にいたします。

これまでの審議等を踏まえながら、さらに、今日の審議のために質問したいということがございましたら、お願いいたします。

特になければ、皆さんから意見をちょうだいしていきたいと思いますが、今までの審議、あるいは小委員会の委員長さんの報告、質疑応答、そういったことを踏まえまして、地理的分野の場合には、主体的な学習を促すことや北海道に関する内容の取り扱い、例えば雪の扱いでありますとか、アイヌ民族の扱いとか、そういったことを中心に各教科書の特徴があり、また具体的なとらえ方の違いがあったかというふうに思いますが、そういった点を踏まえてご意見を頂戴したいと思います。

中学生の子どもたちにとって、どの教科書が一番望ましいかということでご意見をいただければと思います。当然に採択参考資料の観点A、札幌市の研究結果の観点Bなどを踏まえてということになりますが、どなたからでも結構ですので、ご意見いかがでしょうか。

なければ、私のほうから指名をさせていただきますが、設楽委員からお願いします。

○設楽委員 使用上の配慮ということに関しては、以前にも教科書のご意見伺ったところ、帝国書院は特に特徴はないということだったのですが、例えば、日本の各地方を調べて、その学習のまとめという形でしているところが少し特徴かなと思ったんですが、北海道に関して考えると、教育出版の分量も多いですし、それから、特にアイヌの方々に関する記述もかなりなされているので、そういう意味では特徴があるかなというふうには思いました。

東京書籍、判が大きいのですが、例えば、富良野のラベンダーの写真は北海道らしいなというふうに思って、これはやっぱり判が大きいことの魅力かなと思うのですが、全体として、どちらかというと教育出版かなというふうに思いました。

○山中委員長 ありがとうございます。次、西村委員お願いします。

○西村委員 東京書籍がワイド判になって、とても見やすくなって、情報量がた

くさんあるのだらうなと思うのですけれども、反面、ちょっと大き過ぎかなという。大き過ぎかなというのは、ノートとかと合わせたときに、先ほど英語で開隆堂のちょっと大きいを選んでしまったのですけれども、メリットもありデメリットもある大き過ぎかなというふうに思いました。内容的には、その3者ともそんなに遜色がない、悪いところはないのですけれども、いい点を挙げるとすれば、教育出版の、やはりアイヌのところを2年にわたってやっていらっしゃるところ、それから、帝国書院が北海道のことを歴史的視点からという、内容的には同じだというふうにこの前説明していただいたのですけれども、歴史的背景の視点を中心にしてというタイトルより、自然環境を中心とした考察という、北海道ではやっぱり歴史というよりは自然が売りなのだということが前面に出るのがいいかなというふうに思って、そういうふうに考えていくと教育出版が無難かなという印象を受けました。

○山中委員長 それでは、池田委員お願いします。

○池田委員 私は、同じようにワイド判が非常に見やすくいいなというようなことで、気に入ってはいるのですけれども、一つ大事なところは、教育出版なのですけれども、地域から地球を考えてみようということで、甘いチョコで苦い現実とか、子どもたちの飛び込みやすいものから、具体的な日本以外の地域の実情が明確になり、それが広がりを見せているというふうなこととかが、「甘いチョコレート」の苦い現実」の、教育出版の59ページにあるのですけれども、そんなところからいろいろな広がりが見えてきているなという意味で、教育出版がいいかなというふうに考えておると、それからアイヌについても、特設のコーナーを設けたりしているところもちよっとありがたいかなと、そんなふうに思って、私は教育出版を薦めたいなと思っております。

○山中委員長 臼井委員はいかがでしょう。

○臼井委員 この3者のものなのですけれども、教育出版とそれから東京書籍には、最後に用語の解説があるのですけれども、帝国書院には用語の解説が載っていないというところがあって、知識のまとめというところで用語解説はそんなに大事かなというところで、この東京書籍と教育出版の2者を主にしてちょっと考えてみました。

東書がいいなと思ったのは、ワイド判なので、地図とか資料とかがたくさん載っているの、そういう意味で情報量がとても多いし、それから、この広い分をメリットとして、例えば131ページのところを見ますと、写真で見た扇状地と、それから地図の例えば三角州、扇状地というようなものとの関係ということがワイド判ならではというところで見やすくなっているというところもあって、こういうところ、地図の見方ですね、地図スキルアップというのが136ページのところでも、地図のことについてかなり大きく載っていてわかりやすいところで、東

書もいいなと思ったのですけれども、その一方で、教育出版は、僕たち、よく略図を書くということが実際的には非常に便利なスキルなのですけれども、130 ページのところ、教育出版の日本の略地図を描くというところで、略地図のやり方から載ってあって、あとは教育出版のところで個人的にはいいなと思うのは、例えば 178 ページのところに、「現代日本の課題を考えよう」というところで、荒廃の進む日本の山村というところがありました。あるいは 206 ページのところで、多文化共生をめざしてということで、今の日本が抱える地域問題なり、そういう今日的な話題ということをやっているというところで、ある意味で、現代の社会問題と今の勉強ということですね、ということをつなげようというところがあって、これも発展的な学習ということにつながって、これはいいのではないかなと思うのですね。

等々を考えて、それぞれいいところがあるなと思っているのですね。今のところ、申し訳ないですけれども、この2つが同じぐらいだということでもあります。

○山中委員長 それでは、北原委員いかがでしょうか。

○北原委員 各者とも、それこそエネルギーとか、自然災害とかについては、特に触れていないのですが。これからの世界を考えていくときに宗教って結構大きな課題だなというふうに思っているのですが、宗教に関する記述を見ていきますと、東京書籍が 31 ページ、帝国書院が 38 ページ、そして教育出版が 28 ページからそれぞれ記述されているのですけれども、宗教、どんな中身になるのかということについて、各者コンパクトにまとまっては書かれているのですけれども、教育出版が具体的に日本人の宗教とか、宗教と人間とか、宗教対立の原因、宗教をめぐる共存と対立とか宗教対立の背景とかというあたりをかなり詳しく書き込んでいるのですね。これからの世界を考えていくときに、地理的な分野から考えていって、宗教についてどれだけ深く考えるかというような、子どもたちがこれから世界を考えていく上で重要なポイントになるわけで、そのことについてしっかりと書かれているかなと。

あわせていくと、連合ということも大事なポイントですが、連合について書かれているのも実は教育出版。

さっき池田委員がおっしゃった「甘いチョコレートの苦い現実」で、330 円のコーヒー店頭販売価格に対して、豆代はおよそ 5 円ですと。コーヒー豆の選別作業をしている賃金が 8 時間働いて 59 円ですというふうな現実を示しながら、フェアトレード等についても書かれていて、結構いいコラムだなというふうに思いました。

もう 1 つ、コラムの件で言いますと、73 ページ、教育出版。ここで原子力発電と環境問題について、「地域から世界を考えよう」というこのコラムの中でちょっと触れて、問題として提起していますよというあたりが大事なポイントかなと

いうふうに思っで見させていただいたところです。

そんなこんなを見ていくと、教育出版が中身的にしっかり充実しているかなというふうに見させていただきました。

○山中委員長 そうすると、臼井委員がどちらともないような状態とおっしゃいましたが、今の北原委員のご意見などに関してはいかがでしょうか。

○臼井委員 教育出版で異論はありません。

○山中委員長 そうすると地理に関しては、教育出版を選定するというところでよろしゅうございますか。

(「はい」の声あり)

○山中委員長 では、地理的分野につきましては、教育出版を選定するという事にいたします。

続いて、歴史的分野。歴史的分野につきましては、東京書籍と教育出版と帝国書院という3者が選定候補となっています。今までの審議、小委員会の委員長さんの説明などを踏まえながら、さらにご質問があれば。

特にございませんか。

○西村委員 歴史と先ほどの地理の関係なのですけれども、札幌市では、ほとんどの学校が並行して1・2年生でやっていくということをお伺いしたのですけれども、例えば1学期に集中して歴史だとか、2学期を集中して地理というやり方なのか、それとも1週間ごとに変わるようなやり方なのか、その辺ちょっと伺いたいと思います。

○工藤指導担当係長 お答えをさせていただきます。学校によってさまざまなやり方があるのですけれども、大きく2つに分けられると思います。1つは、単元でまとまった時間なり10時間ぐらいの単元で地理と歴史を入れかえていくというような形でやっている学校と、それから、1年生、2年生をそれぞれ大きく前期、後期に分けて、例えば1年生の前期を地理やったりですとか、その後期を歴史やったりだとかというような形でやっている学校が一般的かなというふうに思います。

○山中委員長 よろしいですか。

○設楽委員 そうすると、歴史的分野の教科書とそれから地理的分野の教科書の記述が比較的共通していたりとか、そういうほうが望ましいのでしょうか。

○工藤指導担当係長 一概には言い切れないかなと思うのです。確かに、その教科書のつくりとか、コラムの程度ですけれども、そんなところが共通点は同じ会社は当然あるのかなと思う一方で、各教科書の初めのほうには、それぞれコラムの名称とどういう意味合いがあるのかといったところが示されておりまして、それぞれの分野の最初のところでそのあたりを理解できれば、ある程度はクリアされるかなと思います。

○山中委員長 ほかによろしいでしょうか。

それでは、歴史的分野についての選定の関係の協議を進めてまいりたいと思いますが、歴史的分野の場合には、いろいろ審議の過程で問題解決的な学習の取り扱いでありますとか、アイヌ民族の歴史や文化等の取り扱いなどについてそれぞれの特徴があり、また違いがあったかなというふうに思われますが、等々を踏まえながら、また、採択参考資料の観点A、あるいは札幌市の研究結果の観点B、そういったことを踏まえながら、さらにご意見をいただきたいと思います。

それでは、西村委員お願いします。

○西村委員 先ほど質問したように、地理と歴史、同じ出版社がいいのかなと思いつつ見ていたのですけれども、やっぱりそれぞれの会社に特徴があるのかなと思って、私は歴史に関しては、結論から言えば帝国書院がいいのかなというふうに思いました。その理由の1つが、いろいろあるのですけれども、そのうちの1つが、足尾銅山の取り上げ方が、中学生の写真などを組み込んで、そして我がことというか、歴史のことを学びながら、現在のことに至れるという、そういう一つの例ではあるんでしょうけれども、歴史を学びながら現代の自分を考えることができるというような取り組みになっていること。それから、もう1つは、縄文文化の後にオホーツク文化圏など北海道の歩みがわかるようなことが丁寧に書かれているということなどで、帝国書院がいいかなというふうに思いました。

○山中委員長 それでは、次、池田委員から。

○池田委員 私は、教育出版と帝国書院と迷っております、それは、帝国書院のほうは、今あった足尾鉍毒事件についてはおっしゃるとおりだなというふうに思うのですけれども、一方、教育出版のほうは、そういう要所要所に「歴史の窓」ということで、その背景を少しずつポイントポイントで語っているところが理解をより深めていくことにつながっていったというところで、悩んでおりますし、内容的にも拮抗しているかなというふうに思っております。

ただ、歴史人物カードがちょうどどこかにあったと思うのですけれども、そういうこととかも含めると帝国がいいのかなと思ったり、でも、やっぱり「歴史の窓」というのは捨てるがたいなということで、迷っているというのも現実であります。でも、あえて言うと、帝国書院かなというふうに思っております。

○山中委員長 ありがとうございます。続いて、臼井委員お願いします。

○臼井委員 私もこの3者について見ていて、とても難しいなというところが実感であります。割と用語の整理というところに結構気になっていて、それで、例えば重要な言葉について、あとで勉強を振り返るときにと考えてみると、この東書の場合に載っているということと、あと、これは東書に載っている。あと東書のこれだけを見ていてメリットは何かというと、各始まりのところに、例えば36ページの大化の改新のところを見ると、大化の改新の政治はどのように進展して

いったでしようかというところで、次のページを開くと、律令国家の成立と平城京とあって、律令国家はどのようにしてでき上がったでしようかというぐあいに、必ず各ページのめあてを1行か2行ほど書いてあるのですね。これは子どもにとっても何を学ぶかということがはっきりしているのと、それから、先生方が、特に若い先生からすると、指導目標ということをはっきりと明確化できるという点では、入りやすい教科書ではなかろうかなというように思いました。

それから、教育出版の場合は、地理の場合と共通しているのですが、「資料から歴史を探ろう」というようなものがあつたりとか、「人物と地域から歴史を探ろう」というようなことがあつたりして、ちょっと発展的な読み物みたいなところから歴史を考えるというところがあつて、これはこれでまたいいなと思いますし、それから、帝国書院の場合には、ほかとちょっと違うのは、地理と公民との関連づけを行っている点とか、それから北海道に関して言うと、歴史の舞台というところで、162ページの帝国のほうを見ますと、移住と開拓が進む北海道というところで、見開き2ページで北海道の開拓ということについて出ていますし、あるいは文化のことというアイヌ神謡集についての知里幸恵の紹介も載っているのですね。

そんなことで、これを甲乙つけろと言われると正直ちょっと難しいのですが、そのバランスとといいますか、教えやすさということで考えてみると、東書がほんのわずか、バランスと、それから今言った用語解説があり、それから各ページごとに目当てが明確になっているというところで、東書がいいかなということですが、この3つを正直、ほとんど差がないというぐあいのところであります。

○山中委員長 ありがとうございます。設楽委員お願いします。

○設楽委員 私は、東書が入りやすいかなというふうには思ったのですね。きちんと歴史として学ぶときに、小学校から、どんなふうを考えていくかというような流れが明確になっていて、そういう意味では入りやすいと、そういうふうに感じました。

記述としては、教育出版が特に私の学んだ歴史と似ているというところもあるせいか、割合入りやすいというか、記述としては入りやすかったというふうに思いますので、どちらを選ぶかというふうになるとちょっと困ってしまいます。

ちょっと大判なのですが、東京書籍がスタートとしては入りやすいかなというふうに感じました。

○山中委員長 北原委員。

○北原委員 地理と歴史について、教科書会社は必ずしも一緒である必要はないだろうというふうに思います。帝国書院、例えば44ページを見ますと、人と自然とのかかわり、未来へつながる社会ということで、地理と公民、それぞれにど

うかかわっていくかという、このシリーズがずっと続くのですね、この教科書。並行して地理と歴史をやっていくといいながら、どこでどういうふうにつながりをつけていくかということについてはなかなか難しく、直接教科書等に、ここでこういうふうにつながりますよということが記述されていることが少ないのですけれども、少なくともここを、こういう記述があれば、どうつないでいくかということが見えてくるのだろうと。それがπ型で進めていく上で大きな要素だろうなというふうに思っていました。そういう意味で、このつくりが非常にいいかなと。

あと 104 ページのあたり、琉球王国とアイヌの人々への支配ということで、北海道はアイヌというだけでなく、琉球とのつながりの中、沖縄とのつながりの中で語っていくとかという視点も大事なポイントかなというふうに思ったりして、そういう意味でいうと、この帝国の取り扱いがなかなかいいかなというふうに思っていて見させていただいたところでした。

○山中委員長 ご意見が微妙なところで理解というか、どっちかといえばこうだということもおっしゃりながら、全体としても、まさにそれを反映したような、なかなかすばつと決めかねるようなご意見だったと思いますが、今の皆さんのご意見、ほかの方のご意見なども含めながら、さらに補充するようなご意見ありませんか。お願いします。

足尾銅山の関係なんかは、東京書籍がかなり具体的な被害とその後の経過をたどって現在の様子まで掲載していたように思いますが、将来的な環境破壊に対しても考えることが可能な問題だったかなと思うんですが、指導主事の方、そうですよね。

○工藤指導担当係長 足尾銅山で、東書で言いますと、東書の 178 ページのところには深めようということで、特設のページが設けられていて、ここで当時のことから解決への取り組みといったところまで載っているところが特徴的な形になっているかなと思います。

○山中委員長 先ほど帝国の話については、現在の中学生が植林の取り組みというところで、そういう意味で、自分たちに身近かなという面があると思います。いかがでしょうかね。

○池田委員 もう 1 つよろしいでしょうか。この間、「チェック&トライ」をやってみたのですが、なかなか引き戻されて、これが先ほどの教育出版にある歴史の背景ですかね、それと似たようなところがあって、それもちよつといいなというふうに薦める 1 つでもあります。でも、この「チェック&トライ」は、とても歴史に向かって深みを深めていくのではないかなという気が、帝国の場合しました。

○西村委員 ちよつと質問。

○山中委員長 どうぞ。

○西村委員 外国の言葉というか、外国の地名や人の名前なのですけれども、特に、同じ漢字を使う中国語とか韓国語の表記として、東京書籍も、それから帝国書院、多分両方書いてあるのですけれども、現地読みと日本語読みと両方ふりがなを振ってあるようなのですけれども、実際、学校で教えるときには、どちらを教えているのですか。

○工藤指導担当係長 両方を扱ったりして、現地読みと、中学校の場合ですと、やることがありますけれども。

○西村委員 どっちがいいかわからないんですけれども、帝国書院が多分、上に書かれているのが現地読みで、下に書かれているのが日本語読みと。ところが、東京書籍は、上に書いてあるのが日本語読みで、下に書いてあるのが言語に近い発音の言葉なんじゃないかなと思うのですけれども、こういうのはあまり差としては大きな差ではないのですね。

○工藤指導担当係長 両方載っているから親切ということはあるかもしれませんが。

○西村委員 いえ、上と下で。

○工藤指導担当係長 順番はですね、それは、はい。

○西村委員 全然関係ないですか。

○工藤指導担当係長 そうですね。

○山中委員長 どなたか、その辺に関して。臼井委員何か。

○臼井委員 正直、本当に迷うところだなと思って、今索引一つ見ても、実際、この東書で、人物を見ますと、例えば袁世凱（えんせいがい）という人は、ユアンシーカイというようになっていたりして、現地の読みに対応するようなことが載っておりますし、それから、その一方で、帝国書院のところの人名索引は目次の後というところで、たしかこっちも見ていますと、例えば袁世凱（えんせいがい）というのを、こっちもユアンシーカイというように載っております、その意味では、両方とも日本での読みでやっているのを一義的にしておいて、そして、いわゆるもともとの音に近いものを入れているという点では、両方とも同じような扱いなのかなというように思いまして、そういう点では同じようなものかなと思いました。

○山中委員長 指導上の入りやすさというか、子どもたちから見た入りやすさ、両方あるのだろうという気がしますが、その辺はどうでしょうか。

○工藤指導担当係長 なかなか現地読みでは難しい、一緒の読み方は難しいので、例えば名前なんかですと、ふだんは、例えば袁世凱（えんせいがい）も今話題がちよっと出ていましたけれども、袁世凱（えんせいがい）という形で一般的にまず覚えながら、でも、やはり本来的な呼び方というのを少しずつ覚えていくとい

う形になるかなと思いますので、そういう段階はあるのかなと。

○山中委員長 全体的にこの教科書というのは、名前の問題以外にも、子どもたちが入っていきやすい、あるいは指導上入っていきやすいという点ではどうなのでしょう。違いはありますか。

○工藤指導担当係長 ちょっとそこまでの、例えばふりがなとか、そこまでは正直調査はしていない部分なのですけれども。

○山中委員長 そうしますと、今のところでは、帝国書院のほうがいいのではないかなという方が3名、東京書籍のほうがいいのではないかな、要するにいずれも微妙な、決定的にということではないのですが、というような状況であります。

○北原委員 子どもの入っていきやすさということかというと、例えば帝国のタイムトラベルとかというものが結構、いろいろな想像を膨らませながら、そこからいろいろな部分を見ていくという意味で、子どものとっかかりやすさという意味でいうと、工夫が凝らされているなというふうに思いました。例えば、タイムトラベルスリーでいうと26ページとか、このシリーズがずっと続きます。

○池田委員 タイムトラベルの絵は結構迫力ありますよね。

○北原委員 物を考えていくきっかけづくりには使えるのかなというふうに思いました。

○山中委員長 それでは、多数決で決めるというわけではございませんが、かなり接近した教科書ですけれども、総合的に見て帝国書院という方向で進めましょうか。

(「はい」の声あり)

○山中委員長 よろしいですか。

(「はい」の声あり)

○山中委員長 それでは、歴史的分野につきましては、帝国書院の教科書を選定するという事にさせていただきます。

続いて、公民的分野でございますが、公民的分野につきましては、東京書籍、教育出版、帝国書院の3者が候補に挙がっております。前回までの審議等を踏まえて、この場でさらに質問したいことがありましたら、お願いいたします。

特になければ、早速ご意見をちょうだいさせていただきたいと思っております。

公民的分野の場合には、問題解決的な学習の取り扱いなどの観点におきまして、いろいろな違いというのが検討されていくのかなと思いますが、そういうことを頭に置きながら、皆さんからご意見を頂戴したいと思います。

順番からいきますと、池田委員からお願いいたします。

○池田委員 これは、私、それぞれ身になって、特に市長の身になってとか、そういう自分に置き換えてやるのが、やっぱり政治参加ということですね、それ

は今後、地域社会にかかわるということでは、とても東京書籍がいいかなというのと、ディベートがちょっと入っていましたので、よかったかなというふうに思っています。

ただ、帝国のまちの活性化プランナーも見たときに、これもいいなということ、ただ、主体とすると、やはり自分たち、生徒たち、子どもたちが主体になるという意味では、東京書籍が一番いいかなというふうにとらえておりました。

○山中委員長 結論的には、東京書籍。

○池田委員 東京書籍ですね。

○山中委員長 これも入りやすさというか、生徒たちが学びやすいという。

○池田委員 学びやすいということですね。

○山中委員長 それでは、臼井委員お願いします。

○臼井委員 この3つの中で、例えば教育出版が特徴的だなと思うのは、これだけではないのですけれども、公民の最初に点字のものがあって、ある意味でハンディキャップを持った人ということのも、これで考えようという点では、地域のつながりとか、そういういろいろな人に対する理解という点でのものがあって、一つ注目していいかなと思いました。

それから、印象なんですけれども、ページのレイアウトがここの出版社はすっきりしているかなということと、あと、例えば、15 ページのところの「公民の窓」というのが幾つかありまして、例えば介護支援ロボットに望むことというようなことがあったりとか、それから、少し発展的なところでは、ディスカッションで大人になるまでに考えたいことということで、ヘーゲルが載っていたり、エリク・エリクソンが載っていたりというところで、ちょうど中学生の自己を考えたり、あるいは自分の進路を考えたりというようなことについての、かなりそういう読み物的なところも含んでいておもしろいかなと思っておりました。

それから、帝国は、池田委員からのお話もありましたけれども、例えば 24 ページのクローズアップというところでは、スロープをマンションで設置するときの費用負担を考えようということで、具体的、現実的な問題についての意思決定のシステムということ、あるいはマンションの騒音問題を解決しようというような形で身近な問題をやっていたりとか、それから、先ほどの地理の教科書の場合も、歴史や公民との関連性とかあったのですけれども、ここでもやはり地理や歴史を振り返るといようなところが載っていたりするというのは特色かなと。

それから東書の場合は、裏表紙のところ、やっぱり地理と歴史、公民とのつながりということがあったりとか、それから、頭の6 ページのところ、スーパーマーケットから現代社会を見てみようというところで、非常に身近なところから考えようという入りやすさという点では工夫があったり、あるいは、机のちっちゃなマークがあって、知識のまとめがあったり、それから、あとのほうでは、

学校のトラブルとか、18年前の自治会のトラブル、それぞれ何かやっぱり工夫しておもしろいなと思ったのですが、結論的に考えてみると、本当にこれは物すごく難しいところなのですけれども、入りやすさというところで見ると、ほんのわずか東書が入りやすいのかなというところでありました。

ですけれども、正直なところ、差はほとんどない。3つそれぞれ特色があって大きな差というのはほとんどないということでもあります。

○山中委員長 それでは、設楽委員お願いします。

○設楽委員 前回の議論のときにもお話しさせていただいたのですけれども、公民のほうは、記述の進め方としては、個人から展開していくという場合と、そうじゃなくて、帝国書院とか東京書籍のようにいろいろな現代社会に関する記述から始まっているものと2種類あって、教育出版は、どちらかというところと個人というか、私たちが生きる現代社会という形でスタートしているので、個人的には、そういう記述で少しずつ個人が成長して、いわゆる社会の一員としてさまざまなことを身につけていって成長していくというような形が私としては考えやすいんですけども、でも、それは個人的な好みであって、いろいろな問題解決的な設問というか、そういう問題が設定されていたり、それから、ディベートとかをするというようなことでは、東書が充実しているのかなというふうに思いました。

どちらを選んでいくかは、まだちょっと決めかねています。でも、これは個人的な好みですので。

○山中委員長 教育出版か東京書籍かと。

○設楽委員 でも、個人的な好みですから、どうでしょうか、いいでしょうか。

○山中委員長 個人的な好みというよりは、どちらが中学生、むしろ中学生にとっていいのかという視点でおっしゃっていただくと、よりいいと思います。

○設楽委員 すみません。

○山中委員長 そこはしょうがない。それでは、西村委員お願いします。

○西村委員 私は、授業を、始め、そして終わりというときの導入、そして振り返りという部分で見ていくと、3者ともいろいろ工夫されていまして、東京書籍は、先ほども言っていましたけれども、最初の部分に一行ずつあって、最後のところにまた説明してみましようみたいなことで書いてありますし、ほかの会社は「チェック&トライ」だとか「トライ」とかという形で書いてあるので、ここではあまり大きな差はなかったのですね。

それで、あと公民分野で何が子どもたちにとって重要なのかということを考えてときに、やはり社会の制度を知ることもちろん大事で、その辺をまた各者それぞれ工夫されていると思うんですけれども、自分の意見を発するという部分ではどうかなというふうに見たときに、東書なのですけれども、レポートの作成の流れをつくっていて、そして、要点を理解することがレポート作成の要点

を理解することができるという流れになっていて、この点では東書がよかったかなという、全部を見たわけじゃないのであれなのですけれども、その点、東書がよかったかなというぐらいで、3者ともなかなか工夫されていて甲乙つけがたいというのが実感です。

○山中委員長 それでは、北原委員お願いします。

○北原委員 今回のレポート作成の流れというのが東京書籍177ページからですね。ここに示されている、いろいろなことを考えさせる教科書づくりになっているのかなというふうに思いました。先ほど池田委員ご指摘されていた帝国書院のまちの活性化プランナーになってみようという部分は、帝国だとここに1つありますけれども、この東京書籍だと、さっきこれも池田委員ご指摘になった市長になって考えてみよう、具体的にどんなふうに考えていったらいいのか、案をきちっと示しながらどんなふうに考えていったらいいのかを考えさせる、これは、これから裁判員制度が進んでいく中で、これについても考えなければならないなというふうに考えていったときに、88ページに模擬裁判をやってみようということで、具体的な事例を出しながら、どんなふうに考えていったらいいのかをしっかりと考えさせて、実際に模擬裁判をやってみよう。あるいは、市長になってみるというようなことで、106ページにはコンビニエンスストアの経営者になってみよう、その立場になってどんなことが考えられるのかということをきっちりと考えさせて、そんな取り組みをしっかりと工夫が見えるのは東京書籍かなというふうに。そういう意味でいうと、子どもたちにしっかりと考えさせていくという意味で、東京書籍がいいかなと。

あと、子どもの権利に関して、条例などをつくっている札幌市として考えていったときに、例えば、東京書籍で言うと、生きる権利、育つ権利、守られる権利、参加する権利、それで教育出版も同じようにこの4つの権利が書かれている。帝国書院だと、戦争被害とのかかわりの中で子どもの権利をうたっている。そういう意味でいうと、4つの権利を幅広くトータルで持っている作りの方がいいのかなというふうに思ったりして、そんなこんなも含めて東京書籍がよりふさわしいかなというふうな形で見させていただきました。

○山中委員長 池田委員、東京書籍でしょうか？

○池田委員 そうです。

○山中委員長 そうしますと、全体的には、設楽委員が教育出版と東京書籍で迷っているというお話でしたが。

○設楽委員 教科書としては、東京書籍がいいだろうというふうに思います。

○山中委員長 それでは、いろいろご指摘があったことなどを踏まえて、総合的に、公民的分野につきましては、東京書籍を選定するというようにさせていただきます。よろしゅうございますか。

(「はい」の声あり)

○山中委員長 そのようにさせていただきます。

それでは、次に地図でございますが、地図につきましては、東京書籍と帝国書院の2者を選定候補とするということになってはいますが、何か、特にご質問ございますか。

なければ、早速、選定のための審議に入っていきたいと思えますけれども、比較的、地図の見やすさとか、あるいは資料の取り扱い、そういったことなどを中心に特徴があり、また違いがあるかと思えますが、ご意見ございますか。

それでは、臼井委員から伺っていきましょうか。

○臼井委員 東京書籍と帝国書院と2つなのでありますけれども、帝国書院のほうが判がちょっと大きくなっておりまして、地図を見るときに読みやすいと。特に、北海道に関する部分なのですけれども、帝国は120ページと、それから123ページの間で、北海道を南の部分と北の部分に分けて随分載っているというところで、非常に見やすいという理由で、私は帝国書院のものを推したいというふうに思います。

○山中委員長 設楽委員いかがですか。

○設楽委員 私も、帝国書院が非常に見やすいし、情報量も多くていいと思います。

○山中委員長 西村委員いかがですか。

○西村委員 私も北海道の地図を比べてみましたけれども、帝国書院で125ページ、東京書籍で99ページを開くと、択捉島が入るか入らないか、きちんと入るか入らないかというものを含めて、やっぱり帝国書院がいいのかなというふうに思いました。

○山中委員長 池田委員はいかがですか。

○池田委員 皆さんと同じなのですけれども、プラス、帝国書院のほうは、この地図帳の使い方、こんなときどうするというのがわかりやすくいいなというふうに思いました。特に、産業を調べたいときというのは、6ページのところで、帝国の6ページのこの地図帳の使い方の中で、産業を調べたいときなどは、特に地図を生かしていく、歴史も文化もそうなのですけれども、有効な使い方ができるのではないかなということも含めて、帝国のほうを推したいというふうに思います。

○山中委員長 北原委員、補足がございましたら。

○北原委員 皆さんのおっしゃっていること、そのとおりだなというふうに思いながら聞いていました。とりわけ北海道の取り扱いについては、帝国に特徴があるかなというふうに見させていただき、ですから、帝国を推したいと思います。

○山中委員長 そうしましたら、この点は特に異論がないようでございますので、

今ご指摘のような見やすいことなど、ご指摘あったところを踏まえて、地図としては帝国書院を選定するというようにさせていただきます。

それでは次に、音楽に入りますが、音楽につきましては、音楽一般と器楽合奏でございます。

音楽一般につきましては、教育出版と教育芸術社、器楽合奏についても同じ教育出版と教育芸術社が選定候補ということになります。

これまでの審議、あるいは小委員会のご意見なども踏まえて、皆さんのほうからさらに、今日この段階でご質問したいというようなことがありましたらお願いいたします。

○**設楽委員** 私、改めて市民意見を読ませていただいたのですが、教育芸術社について2件、非常に見にくいというのか、色がわかりにくいというご意見があったんですが、その点はどうでしょうか。

○**山田（健）指導担当係長** 市民意見を受けまして、小委員会の中でも再考いたしました。両者いろいろな配慮をして編集されていますが、意見の中にもありました教育芸術社の目次については、学習の窓口ということで、確かに、7種類のマークがあって、7つの色を使われています。ここの部分について、小委員会の中では、生徒の中には、もしかしたら見にくい子どももいるかもしれないという意見は出ておりました。

○**設楽委員** ありがとうございます。

○**山中委員長** ほかにいかがでしょうか。

なければ、早速、全体に関してのご意見がありましたらお聞きしたいと思えます。音楽一般の場合には、自分の考えを持って表現する力を高める鑑賞活動や、あるいは表現活動の取り扱い、それから器楽合奏の場合には、表現活動を中心とした取り扱い、そういった観点から特徴や違いがあるように思われます。そういったことを中心にしながら、それぞれのご意見をちょうだいしたいと思います。

それでは、音楽につきましては、設楽委員からお願いいたします。

○**設楽委員** 先ほどちょっとご質問させていただいたのですが、そういうわかりにくさがあるのは困るなということが1点あって、改めて聞いたのですが、教材の内容とか、それから器楽の場合には、例えばお箏のつめとか、指の箏爪であるとか、そういうことが全体的に教育出版が適切かなというふうに思いました。

以上です。

○**山中委員長** 全体的にというのは、音楽一般に器楽。

○**設楽委員** 音楽一般も、それから器楽も。

○**山中委員長** 西村委員どうでしょうか。

○**西村委員** 私は、後ろに載っている合唱曲だとか、すべて扱うわけではないと思うのですが、曲のバラエティーを見ていまして、新しいものから古いも

のまでというところを見ていたのですけれども、教育出版のほうが割と新しいものからスタンダードまで、古いものまで載っていると。子どもたちの興味を引くのかなという、本当に印象だけなのですけれども、そのように思いました。

器楽については、先ほど設楽委員がおっしゃったように、箏の指の使い方、これは子どもの視点からのものが載っているという教育芸術社、それも新しい視点かなというふうに思うので、器楽に関しては教芸。これ、一緒である必要はないのですよね。

○山田（健）指導担当係長 はい。

○山中委員長 どちらかといえばということで、音楽に関しては教育出版、器楽合奏については教育芸術社、そういうことですね。

それでは、池田委員いかがですか。

○池田委員 私は、全体を通じて、音楽を聞いて、それを感じ取ったこととか、それから、それをどう評価するかということが、生徒が主体になってしみ出ていくような全体の流れになっているなという意味では、教育芸術社のほうがいいかなというふうなのと、ソーラン節のところはどっちだったでしょうか。

○山田（健）指導担当係長 活動としては教育出版も教育芸術社も両方載っております。

○池田委員 ソーラン節もとてもいいなと思ったので、これは両方載っているということですね。

それからあと、ゲーム的な感覚もちょっとあるのも教育芸術社だったので、それとてもいいかなと思って、私は教育芸術社のほうを推したいというふうに思います。主体的に発していくというか、与えられたものじゃないというか、そういうような意味合いで。

○山中委員長 ありがとうございます。臼井委員お願いします。

○臼井委員 音楽の一般なのですけれども、率直なところを申し上げますと、2つの違いというのは本当によくわからないぐらいのものなのですけれども、強いて挙げれば、教育出版を推したいという理由は、例えば1つの点で、教育出版の1年生の音楽の18ページのところで、「夏の思い出」とありまして、その右上のところに、ピアニッシモとか三連符とか、ディミヌエンドとかフェルマータなどあって、74ページにまた書いてあるぞというように、一つ一つの、全てではありませんけれども、基本的な音楽記号というものがこんな形で載っているというところは、知識の整理がいいのかなと。

あともう1つ、この教育出版のところでおもしろいなと思ったのは、2・3の下のところの48ページのところで、私たちの暮らしと音楽というところで、アウトリーチ音楽活動、音楽療法ということで、音楽ということのある意味で生活、あるいは、そういう音楽活動とか音楽の治療的な意味ということについても言及

してあるということで、音楽のある種の広がりという点を考えさせているという点で、教育出版ということのを推したいと思います。

それから、あと器楽なのですけれども、これも正直2つの違いというのは十分に認識できるほどのものでないのですけれども、例えば教育芸術社のいいところかなと思ったのは、アンサンブルというところがありまして、いろいろな楽譜が載っていて、これはかなり発展的にできるかなというところはメリットかと思うのですね。ただ、これは音楽についてのある種の全体的な教養ということを考えてみると、どこまで利用可能かなという点を考えて見ると、これも全体的なところからいうと、教育出版のほうが無難かなというように思いました。

○山中委員長 ありがとうございます。それでは、北原委員お願いします。

○北原委員 まず、器楽のほうですけれども、さっき西村委員もおっしゃっていましたが、箏の視点ですね、演奏するときの視点が、一つ大切かなというふうに思うのと、楽器の出る順番です。入れかえて取り組むことは当然可能なのですけれども、出だしに教育出版だと箏が出てきます。今、札幌市の現状からいうと、各学校に二面箏を入れていて、現在は区ごとに1校拠点校をおいて整備し、そこから借りてきて行ったりする。でも、春先にというのは、ちょっと子どもとしても抵抗感があるでしょうし、先生方も抵抗感があるかなと。小学校とのつながりでいくと、リコーダーからスタートしていくというのが極めて自然な流れかなというふうに思っただけでいいところでは、ちょっと見させていたるところです。

音楽一般のほうですけれども、さっきソーラン節の話が出ましたが、教育芸術社の最初、何ページ目ですかね、1枚めくって、伊藤多喜雄が出てくるのですね。教育芸術社の1年生。伊藤多喜雄はあまりメジャーじゃないかもしれないけれども、よさこいソーランは、子どもたちが小学校のときの運動会でたくさん踊っている例があって、伊藤多喜雄を使っている学校も結構あるかなと。この説明の中で、ある中学校のソーラン節をプロデュースするなどという、これ、南中ソーランだと思うのですね。そんなことでいうと、子どもたちのとっかかりとして、結構スムーズに入っていくやすいきっかけづくりなんかも工夫されているかなというふうに思ったりして、そんなことでいうと、教育芸術社がなかなかいいかなというふうに思っただけでいいところでは、ちょっと見させていたるところです。

○山中委員長 両方とも教育芸術社。

○北原委員 両方、教育芸術社ですね。

○山中委員長 そうしますと、これもちょっと考え方が分かれるのですが。

○設楽委員 札幌のそういう現状をお話いただいたので、そういう意味では、器楽は教芸社のほうがいいかなと。リコーダーを扱ってから取り組んでも。

○山中委員長 器楽のほうは教育芸術社。設楽委員としては、器楽のほうは教育芸術社。一般は教育出版ということ。

○設楽委員 まだ教育出版かなというふうに思いますけれども。

○臼井委員 私も、今の設楽先生のお話を伺うことで、さっき北原教育長の話を聞いていて、やっぱり最初、器楽なのですからけれども、小学校とのつながりでいくとリコーダーから入るとというのがやっぱり自然なことで、行いやすいかなと思いました。私も器楽は教育芸術社ということで、音楽一般はまだちょっと。

○山中委員長 そうすると、器楽に関しては、教育芸術社ということで一致するようですが、音楽一般に関して教育出版と教育芸術社で違ってくるということになって。前の審議の質問としてあったかもしれませんが、確認したいのですが、器楽と音楽一般が異なった会社の教科書を使うということに、問題はあまりなかったのですかね。

○山田（健）指導担当係長 はい。

○山中委員長 そうですね。それにしても、音楽一般がどちらにすべきか。

考え方としては、音楽一般についても、生徒の立場、あるいは入っていきやすいというようなところを重視するのか、それとも、その他の質疑として、新しいものから古いものまで取り組めるといった幅広い教材についてご指摘がありましたら、おっしゃっていただきたいと思いますが。

臼井委員から、1年の「夏の思い出」とかにある音符や記号などの記載は、音楽活動の意味を考えるとという上で教育出版のほうがいいのかなどというご意見があったかと思いますが。

○池田委員 それは確かに、教育出版のほうがすぐれているかなと。変えても本当に問題ないのでしょうか。今までそういうことあったのですかね。

○山中委員長 過去にあったのですね。器楽合奏と音楽一般の教科書が違ったということ、過去にありましたか。

○山田（健）指導担当係長 今までの記録に残っている中ではなかったと思います。

○西村委員 娘の教科書を見ていますと、音楽も器楽も見ていると、今日は器楽の授業をするから器楽の教科書を持っておいでと、今日は合唱の授業をするから、音楽と合唱の教科書を持っておいでという感じで、両方を持って行くこともあったのでしょうかけれども、教材が例えばリンクしているということはないですよ。こっちで使って、器楽のほうでも使うというのはないような、違っても大丈夫なのではないかなという感じはするのですけれども。

○山中委員長 異なった教科書でやってみますか。

○池田委員 いいと思いますけれどもね。

○山中委員長 あまり大きな差を皆さん感じてはいないということのようで、ただ、その中で、音楽を教える教師の視点で考えると、使う子どもの視点とか、そういった視点での意見をどうぞ。

○池田委員 いずれにしても甲乙つけがたいので、異なった選択もいいかというふうに思います。

○山中委員長 それでは、必ずしも明確な理由をつけがたいところありますけれども、器楽のほうについては、生徒の立場から入っていくというようなことで、これは教育芸術社のほうを、それからまた音楽一般に関しては、教育出版ということにさせていただいてよろしいでしょうか。

(「はい」の声あり)

○山中委員長 選定理由につきましては、また整理させていただきます。

それでは次に、美術でございますが、美術につきましては、開隆堂出版、光村図書出版、日本文教出版の3者の選定候補というふうになっております。今日の審議のために、ぜひ聞きたい点がありましたら、どなたでも結構です、よろしくお願いたします。

特にございませんか。

なければ、早速、ご意見を伺うということにしたいと思いますが、美術の場合には、鑑賞と表現の関連づけとか、あるいは教科書に掲載されている作品の取り扱いというようなところを中心に、教科書の特徴あるいは違いがその中にあるかと思われま。そういったことも意識しながら、さらにご意見、質問していきたいと思ひます。

美術につきましては、今度は西村委員から、お願いたします。

○西村委員 どれも私たちが習ったころよりきれいで、本当にすばらしい教科書になっているのだなというふうに思ひました。ただ、美術があまり得意でなかった私の視点から考えてみたときに、子どもの作品、生徒作品がたくさん載っているという開隆堂ですか、これを見ると、自分たちのレベルではこのくらいまでしているのだという、ちょっと励みというか、それになって、開隆堂が非常によかったなというふうに思ひました。それだけというか、その1点だけで開隆堂を選んでしまったというところはあるのですけれども、開隆堂がいいかなと。

あと光村でよかったなと思うのは、見開きの風神雷神でしたか、どこかにそういうのが確かあったと思うのですけれども、あれは迫力があつたなと。この紙面をうまく使ったやつだったなというふうに思ひました。

あとはこの表紙ですね。非常に札幌のイメージが強いイメージがあつていいのですけれども、やっぱり美術が不得意だった私としては、生徒作品に励まされたなというふうに思ひました。

○山中委員長 ありがとうございます。それでは、池田委員いかがですか。

○池田委員 美術は一番悩ましました。すべてすばらしいので、今、どれがいいのかというのは本当に甲乙つけがたいなというのが私の印象なのですけれども、ゲルニカが捨てがたいかなという、そこからの広がりというのは大きいかなという

ふうにも思ったりもしましたし、開隆堂の「心ひかれる風景」、この言葉も捨てがたいなと思って実はいたものですから、あえて挙げます。

ただ、心ひかれる風景というのは、結局、それが子どもたちに美術を近づけるんじゃないかなということで、開隆堂がいいかなというふうに推薦したいというふうに思っております。甲乙つけがたいと思います。

○山中委員長 ありがとうございます。それでは、続いて臼井委員お願いします。

○臼井委員 それぞれ特色があって、なかなかどれはということを決めがたいのですけれども、例えば光村の教科書を見ていていいなと思うのは、本当にグラフィアがものすごくきれいですね。ですから、さっき、器楽と音楽一般とありましたけれども、この美術の鑑賞ということを考えてみると、この光村が一番いいかなというふうに思いました。

あと個人的に、僕は中学校のとき図工2だったので、そういう個人的なことを含めて、できの悪い子どもに対してどう対応するかなという、我が身を振り返って考えてみると、開隆堂の生徒作品がすごく多いのですね。その意味で、ある意味で、中学生の等身大の、こういうやり方もできるだろうな、もちろんいい作品を見るというのも大事なわけだけれども、そういう点で、指導する側からしても、こういう生徒作品が多いというほうが指導しやすいのかなというように思って、このあたりは本当に推論が随分入っていることありますけれども、結論的に言いますと、開隆堂が、わずかですけれども、いいかなということで。

○山中委員長 設楽委員はいかがですか。

○設楽委員 美術書として見るわけではないけれども、そう考えると、確かに光村の大きな風神雷神とか、ゲルニカとか、物すごくインパクトがあるのですけれども、ただ、やはり中学生が自分で、鑑賞だけではなくて、自分で制作しようとか、自分の観点でとかというふうに考えると、今までおっしゃったような点で開隆堂がいいのかなというふうに思います。

一つ、これは「自画像、今を生きるあなたへ」というのは、ちょっと光村もいいなと思ったので、あっちこっち気持ちが動いているのですが、開隆堂でいいと思います。

○山中委員長 北原委員お願いします。

○北原委員 今の、「自画像、今を生きるあなたへ」、「手紙～拝啓 十五の君へ～」という、この取り扱いというのは、ただ単に子どもの作品が載っているということよりは、書くことの意味とか意義とか、それから、後々どんなふうに分が書いたものが残ってくるのかということも含めて考えられる扱いになっている。鑑賞の作品としてもあり得るし、自分が書いていくきっかけづくりにもなるかなというふうに思いました。

ゲルニカも、鑑賞として出てきている、例えば谷川俊太郎の「生きる」という

詩とあわせて載せている。考えさせたり、国語の教科書でしたでしょうか、自分なりのゲルニカというような取り扱いとしてはありますけれども、そういうことを考えた上であれば、いろいろな展開が可能につくりになっているかなというふうに思いました。そういう意味でいうと、光村、捨てがたいものだというふうに思ったところです。

ただ、生徒作品がたくさん載っていて開隆堂いいですということについても、それはそれとして、その意義としては十分わかります。どちらかといえば光村がいいかなというふうに思いますけれども、開隆堂も捨てがたいという気持ちであります。

以上です。

○山中委員長 生徒作品が多いことで、指導上のよさというか、あるいは指導しやすさとか、その辺はどうなのでしょう。

○紺野指導担当係長 生徒作品が多いというよりは、西村委員のお話にもあったような、こういう作品ができるという意味では、参考になるというご意見と、同時に、ある意味、枠をはめることにもなるという、両方の意見ですね。

○山中委員長 枠をはめるというのは。

○紺野指導担当係長 最初にこういう作品という印象が強くありますので、こういう作品を作ればいいのかというものを生徒が思ってしまう。そういう可能性もあるという意見もありました。

○山中委員長 そうすると、指導上、工夫が必要だと。

○紺野指導担当係長 指導上、工夫が必要です。

○山中委員長 今の皆様のご意見としては、開隆堂のほうに傾いてはいるのですが。どうですかね。美術というのは、正直言って、凡人には理解しにくいけれども。

○池田委員 やっぱり生徒の作品が多いというのが、とっかかりとしてはいいのではないかなという気がしますけれども。

○山中委員長 それでは、枠にはめるような視点もあるというような視点は、指導上、十分覚悟を先生のほうでしていただくということをお願いしながら、教科書としては開隆堂を選ぶという方向でよろしいでしょうか。

(「はい」の声あり)

○山中委員長 では、そのように取り扱わせていただきます。

時間も大分たっておりますので、大変お疲れでしょうけれども、引き続きまして、次に、高等学校用の教科用図書についての審議をいたします。

高等学校用につきましては、審議会から、学校ごとに、それぞれの教育課程に応じた選定の候補が挙げられております。委員の方々から選定理由などについて、さらに今日質問したいということがございましたら、よろしくお願ひします。

特にございませんでしょうか。

1点だけちょっとお尋ねしておきますが、数学Ⅰ及び数学Aについては、平成24年度から学年進行によって先行実施される学習指導要領に基づいて数学の教科書が編成されるということになっていますが、大通高校の場合には、現行の学習指導要領による数学Ⅰ及び数学Aもあるということになるのですか。

○宮田指導担当係長 大通高校なのですけれども、単位制を採ってしまして、例えば自分の学力や興味・関心とか進路希望に合わせて教科科目を選択履修という形になっています。通常ですと、1年次で、数学Ⅰ、数学Aを履修しますがけれども、大通高校では、数学Ⅰと数学Aを1年次で履修せず、2年時以降において学習できるような教育課程表になっておりまして、ただ、今年の入学生で、1年時に数学Ⅰ、数学Aをとっていない子は、来年度以降にとれるような形の教育課程表になっています。そのために来年度の教科書採択においては、現行の学習指導要領による数学Ⅰ、数学Aの教科書が必要になります。

○山中委員長 わかりました。ありがとうございました。

ほかに、特にご質問ございませんか。

なければ、高等学校については、候補として挙げられております教科用図書を選定するというところで決定してよろしゅうございますか。

(「はい」の声あり)

○山中委員長 では、高等学校用教科書につきましては、既に候補として挙げられている教科用図書を選定するということにいたします。

次に、特別支援教育用について入ります。特別支援教育用教科書につきましては、児童生徒の障がいの種類や程度に応じて、一人一人に適した教科用図書を提供できるようにするという観点から、各種目とも幅広く選定の候補が挙げられております。この関係につきましては、今日この段階でご質問がさらにございましたら。

(「なし」の声あり)

○山中委員長 それでは、特別支援教育用の教科書につきましては、候補として挙げられた教科用図書を選定するというところでよろしゅうございますか。

(「はい」の声あり)

○山中委員長 では、そのようにさせていただきます。

以上をもちまして、本日の審議において、中学校用教科書、それから高等学校用教科書、及び特別支援教育用教科書の選定が終了いたしました。

中学校用の教科書をそれぞれ選定した理由につきましては、これまでの審議と本日の審議を踏まえて、事務局にまとめていただきまして、10日の会議に議案として提出していただくということになります。そういうことでよろしゅうございますね。

(「はい」の声あり)

○山中委員長 次回、8月10日は、その選定理由につきまして、皆さんで確認をした上で、最終的に、中学校用教科書、高等学校用教科書、それから特別支援教育用の3つを含めまして、平成24年度に市立学校で使用する教科書を採択するという形をとらせていただきます。そういうことでよろしゅうございますね。

(「はい」の声あり)

○山中委員長 それでは、事務局のほうでは、大変時間もなくて準備が大変でしょうけれども、よろしく願いいたします。議案の準備をお願いいたします。

そのほか、この段階で特に皆さんから何かございませんか。

(「なし」の声あり)

◎ 閉 会

○山中委員長 以上で、教育委員会会議を終了いたします。本当にご苦労さまでございました。